備前橋たゞ一個を隔てし我家へ近づきながら、現在の兄として妹への傳言を頼むといふは、もやはり妹の良人扱ひに打解けたる貞吉の言葉、賴まれし省三また心の底に包みきれぬ笑を漏らして、かうなれば祕すべき必要もなし、

「實はね、今まで、二人で、ぶら〳〵歩いて居たンだから、ちよいと一足、早ければ三人一處に、どッかで夕飯を食べたに」

わざと知らぬ顏の貞吉、これも妹のため第一に父のためと、なるべく平生の氣性を押へてどこまでも自己といふものを打消しながら、

「や、さうですか、そりやァ惜しい事を仕ました、おまけに折角の御馳走を取逃して、はゝゝゝ」

「ぢやァ幸ひ、君と其邊で、面倒のない洋食でも」

「なァに此方は冗談です、それに及びませンが、彼女まァ何といふ氣の利ないこッたらう、時刻が時刻だから、どッかへ、お供すれば宜いに、たゞ歩き廻ッて今頃、こンなところで其のまゝお別れするなンて、萬事あの通り世の中には一切、まだ茫然と小兒のやうで御坐いますから、どうか宜しく、お願ひ申します」

「いや、さういはれると困るが、少しも世間に擦れて居ない、そこに本人の美點が傷けられず保たれてあるのさ、はゝゝゝ現に先刻も日比谷を歩きながら、コーヒでも飲まうかといへば、嫌だといふよ、はッはッはッ」

いかにも得意らしく、いかにも心地よげに笑うて後、さらに聲を低めながら、

「あれならば今後、どンなにでも教育が出來る、しかし十七で始めて女學校へは少々、氣が進まないだらうから、どッかに相應の人を見付けて、一二年、そこへ通はしたいと思

ッてる、可哀さうに今までの境遇上、餘儀なく尋常小學だけださうで」

戀の省三の愛の極より出でし言葉なれど、これには流石の貞吉も實際に頭を掻いて、おもはず差俯きながら、

「阿父は、御承知の病人で、兄が第一これですから、あれも隨分、みじめな不運に育ちましたよ、教育どころでなく、さンざ餘計な苦勞ばかりさしましてね、只それのみを絶えず恥ぢ入ッて居りましたが、幸ひ、さういふ事にでも仕て戴けば、本人よりも阿父が、どれほど喜びませう」

「君、さう取ッては君、意味が違ッてる、自分としては、打明けたこころ失敬だが、あゝいふ不如意な貧しい境遇から生れて來て、さらに世間の賤しい氣分に染まず、あゝいふ素直な性質を持ッてる點に最も本人の價値を認めてるンだから、現在に於ける教育の有無なンか殆ど問題にならない、寧ろ今日まで生意氣に飛跳ねて女學生たらざりしを本人のため誇りとするよ、はゝゝゝあれで一二年、普通に學べば澤山だ、それからは自然と進みもするし、また殊更ら教育といはずに進める方法は幾何もあるからね、兎も角も自分は外國で修業して來て、いろンな婦人を見てるが、華やかなる交際場の裏面に驚くべき闇黑の内幕ある事を知ッてるだけに猶更ら、刺戟の多い香水の匂ひを放ッたり表情を巧に饒舌り續けるやうな女は大嫌ひだ、はゝゝゝ」

省三より強ひて伴へば、貞吉また強ひて否まず、本願寺の横町より歩みながら語りて、銀座のカフエーに入り、わざと片隅の小さきテーブルに差對ひしが、折しも夕暮の混雜中、さのみ人目に立たざれど、貴公子めいたる紳士風と垢染みたる職工風の對照、さまぐのの客に剛れたる給仕女も聊か不審の眉、それを振返りもせぬ省三は、たゞ美味いものを五六

種との註文、

ナイフの運びよりもホークの働きよりも、椅子を寄せて頻りに聲を潜めながら、

「かう打解けて、こゝまで話せば五十歩百歩で同じこツた、もう何事も遠慮なく、自分の思ッてる通りを言ッて置きたいが、第一に今の家、あれを至急、何とか仕なければならない、あゝいふ裏長屋では病氣のためにもならず、また相當の醫者を呼ぶにしても少々困るしね、本人も今後、總ての事に付いて、あゝいふ近所は蒼蠅いだらうこ考へるが、どうだらう」

今日は自己の本領も棄ての主義も捨てゝ別人の如き柔順さ、一切を父と妹のために感謝の外なき貞吉、

「なアに久しい間、あゝして來たンですから、今更ら急に嫌な筈もありませンが、さうして戴ければ、黒暗の夜が明けたやうで、さぞ喜ぶでせう、しかし失禮ながら萬事まだ今の御身分で、あまり性急な無理をなさらない方が」

省三は俄かに片手を振りて、

「はゝゝゝいくら親がゝりでも、それぐらゐの事は君、なンでもないよ、さういふ心配は決して入らない、こンな事は今こゝで話すにも及ばないが、念のため、安心のため打明けて置かう、知ッてる通り阿父は例の舊式で、何事にも時勢といふものを加味しない自己流の頑固一點張だからね、實は毎月、小遣として與へられるのは僅に二百圓だ、それに交際費として百五十圓、なか〳〵嚴しいよ、はゝゝゝ無論、衣服だの必要の買物だの、また會社に關する交際上の入費は別だがね、自分の勝手に費ッて宜いものは合計、たッた三百五十圓だ、はゝゝゝしかし外に兄弟はなし、不肖ながら川口家の相續人たる省三

こして、もし金が入れば阿父の判は無くとも自由になる銀行が五六軒あるからね、あまり大きくは出來ないが、二萬や三四萬は、いつ何時でも差支なく、また二年や三年、其まゝでも手形の期日にさへ書替へて遣れば平氣だよ、少々の好きな事を仕たッて父子二人ぐらゐ、どうでもなる、これで今まで一文の借金もせず、また餘計な贅澤もせずに來たンだから、自分としても同じ事をする以上、さう見苦しくなく、此方の心持よく、やりたいと考へる」

貞吉は手にせるナイフを置いて、聊か椅子の反身に兩腕を組みながら、

「なるほど、よく分りました、また思召は難有く、承はりますが、いくら御自由でも借金は、いけませンね、どうせ貴君の財産にせよ、今この場合さういふ金で、阿父や妹の事を、お願ひ致したくは御坐いません、衣食住に何等の顧慮なくして月に三百五十圓は、働いて取る月收の何千圓よりは寧ろ、餘裕のある、多い金ですから、もし御芳志に預るとすれば、其中で幾何かづゝ父子二人の身分相應に、仕て頂けば結構です、たゞ單に贅澤をさしてやりたい意味でなく、つまり貴君の富でなく貴君の人格に妹の幸福を包んで戴けば自然、阿父も救はるゝために岡田貞吉お願ひ申す理由です、失禮ながら貴君が萬一、その日稼ぎの貧乏人としても、あの妹なら夫婦共稼ぎで阿父に孝行を盡して下さる人と思ッて、お願ひ申す貞吉です、その他に何の考へも御坐いません、その他は豫ての主義に就て遺憾なれど双方の立場が違ッてるだけです」

銀座のカフエーを出でし時、はや日は暮れて滿目の電燈は輝き、左側に隙間もなく並びし夜店の雜踏、わざと右側を新橋に向うて歩みながら、省三より金口の埃及莨を勸められ加之ゥマッチの火まで擦出されし貞吉、

「や、恐れ入りますが、貴は去年から絶對に禁じて居ります、第一、さういふ貴は猶更ら後が困りますよ、現に只今、御馳走になッた洋食でさへ實は折角、まづいもので馴らした腹の蟲が頭を持ち上げて、たしかに三四日は苦しみますね、はゝゝゝ、冗談は置て先刻お話しの事も、あまり急に境遇の變るのは却て本人のためになりませンから、どうか、その邊の調和を宜しく、つまり身分相應に願ひます」

「さういはれると困るが、兎も角まア、かうなッた以上は萬事、自分の考へに任して置いて貰ひたいね」

「無論、お任せするのでなく、お願ひするンですから、よく仕て戴いて不足をいふ筈は御坐いませンが、あの通り阿父は昔氣質の正直一途で、さッぱり今日の世の中に通じない老人といふ事を、よく御承知下さいませンと、だしぬけに不意打の贅澤は寧ろ、驚愕して有難迷惑を感じませうし、また妹としても、急に一足飛びの贅澤を覺ねさすのは、つまり自己の運命を次第に喰缺いて行くやうなもンで、いはゆる虚榮の時代病にかゝる恐も御坐いますから、たゞ現在のまゝを聊か救ッて頂けば、それに越した幸福はありませン、結局、貴君が川口家の御主人となられるまでの間は、なるべく萬事を内輪にして、世間に目立たぬやう、あまり御無理のないやう、甚だ立入ッた事ですが、月々お小遣ひの内で父子二人のものを只管お願ひ申します、生意氣に僭越の至極ながら事に依れば天下を相手にする現在この兄の口より誓ッて、たッた一人の妹を妻たるも妾たるも彼の運命なりと先日、病院で申し上げたのは、こゝです、もし露骨にいへば彼のため、貴君の富は過ぎて居りますよ、貴君の富は貴君の豫期に反する周圍の事情を卷き起して來て、或は彼の身に思はぬ一場の悲劇となるかも知れませンが、それも覺悟の上です、たゞ老

いたる病人の父に一日たりとも早く、今の貧苦を脱れさせたいのが、いはゞ同胞の願ひですから、いかなる場合も、どンな苦しい事があッても、彼は辛抱しませう、不幸にして彼の運命を破壞せらるゝ時は、人知れぬ日蔭に生涯を埋めてなりとも、せめて彼を戀に包んでやッて下さい」

不屈不撓の貞吉、歩みながら次第に頭を垂れて泣けば、省三、無言のまゝ新橋の橋際まで伴ひ、その別れ際に聲を潜めし一言、

「白痴瘋癲でもなく、精神に異狀も來さゞる限り、當然この省三以外に川口家の相續人は、ないといふ事を承知してくれゝば宜い、その他は自分の決心にあるよ、しかし或時期に達するまでの間、なるべく君の忠告を守ッて、あまり急がず、あまり目立たず萬事を内輪に考へよう」

幸ひ出逢ひし省三に向うて今日こそは一切の我本領を沒却し、たゞ父と妹のために殆ど別人の如くなりし貞吉、うき世の苦しさに平生の膝を屈し腰を折りながら、いふだけの事を言ひ盡し、たのむだけの事を賴み盡して、もはや此上は自然の運命に任す外なしと、其まま新橋の橋際に別れ、電車に運ばれて目黑の堺へ歸り來りしは夜の七時過、

入口へ廻らずとも、通りすがらの一目に見え透く横窓より何心なく差覗けば、六疊二室の中間に吊りし電燈たゞ一個、うす闇き下に今や七人の夕飯最中、加之も食ひながらの雜談、

「全體まア何處へ往ッたらう、あゝいふ問題を我々に殘して置きながら、馬鹿に遲いぢやないか」

「あれで案外、思ッたよりは苦勞性だからね、また氣になッて、自分の家へでも寄ッてる

ンだらう」

「さうかも知れない、もし岡田に親もなく妹もないとすりやア、どンな大膽な事でも遣り出して遣り遂げる人間に出來てるぜ、迚も今の分で承知する男でないが、やはり人情の弱身で、いくら決心して居ても、をり〳〵後を振返るらしい點が見えるね」

「ぢやア後に心配のないやう妹だけ僕が引取ッて遣らうかな、例の間違ひを起す前、ちよいと見たが、あの妹なら何時でも遠慮なく喜ンで引受けるよ、どうせ誰かに引受けさすもンさすれば、兄への友達甲斐に此方へ引受けたいね、はゝゝゝ」

「そンな怪しい友達甲斐があるかい、僕なンかア眞面目に岡田へ對する朋友の情誼として、もし引取るなら妹よりも寧ろ親父の方を引取るね、いくら此方で親切に引取ッて遣りたくッてもあの妹ぢやア君、さう手輕く我々に引取ッてくれと頼まないよ、しかし病人の阿父なら何時でも來るだらう、はゝゝゝ冗談は置いて岡田は實際、あの妹を、ごう始末する心算だらうね、勞働問題と共に我輩これを捨て置き難き事件として、大に心配してるンだよ」

「おい〳〵、よけいな心配だ、ふざけずに早く飯を食ッて仕舞へよ、岡田は目の見える男だ、これから我々の熱心程度と活動次第で、あの妹を懸賞に出すかも知れないからね、それを樂みに一意專心、主義のために努力し　働かうぢやないか」

「や、うまいところへ幕を卸した、それに限る、その覺悟で遣らう、はゝゝゝ」

「だがね、をり〳〵岡田あの面で惡洒落　恍ける癖があるから、もし阿父を懸賞に出された時は、どうする」

どッと一時の爆發的に笑ふ聲、今日の若きものとして此くらゐの馬鹿さ加減なくては元氣

もなく、小怜悧に蒼白い面を伏せて半病人の如く痩腕を組む奴には迚も出る筈なしと、貞吉は寧ろ一種の面白味に微笑を含みながら、入口に立廻りて、

「おい今、歸ッて來た」

わざと何事も知らぬ顏に、まだ箸も置かざる七人を見廻しながら、

「も少し早く歸る心算を、ちよいと用の都合でね、遲くなッたが、相變らず元氣に賑かな飯だなア、今そこまで來ると何だか馬鹿に面白さうな笑ひ聲が聞えたぜ、あの勢ひぢやア大丈夫、石や瓦を食ッても胃病なンかになる氣遣ひなしだ、はゝゝゝ全體、ごンな面白い談話だい」

妹を懸賞にと惡く洒落れた奴、おもはず首を縮めて横を向けば、その隣に病人の阿父を持ち出した奴は近火の恐れ、狼狽へ氣味に慌てゝ岡田の茶碗を取出しながら、

「實はね君、もう今に君が歸るか、歸るかと平生よりは一時間も遲く飯を始めて、わざと時間潰しに話しながら、ゆる〳〵食ッて待ッて居たンだよ、おい誰か岡田の箸を出さないかい、氣の利かない奴だ」

貞吉は苦笑ひの片手を振りながら、

「いや、折角だが途中で、すまして來たよ、はゝゝゝところで先刻、あゝいふ問題を殘して其まゝ出たンだから、後で十分、研究も相談も出來たらうが、結局七人の一致した點は、どう極ッた、その返答次第で僕は改めて諸君のため、懸賞を出すよ」

「懸賞、さア大變だ、聞えたぞ」

「かうなると傍が迷惑する、懸賞の欲しい奴は君、そこの二人だ、あとの五人は眞面目だッたよ」

岡田貞吉、天井を仰いで總身を搖りながら大口の高笑ひ、

「はッはッはッ、妹と阿父の懸賞、よかッたね、うまい洒落だ、なアに怒るもンかい、學校の教室で道德修身の講釋ぢやアなし、ごうせ一時の座興に遠慮なく笑ッて馬鹿口を利く以上、其くらゐの洒落氣が出るやうでなくッちやア無效だよ、譽めていへば綽々たる餘裕ありだ、僕は寧ろ快活に面白いと考へる、加之も例のビール瓶を投げた先生の口より妹の懸賞が出たのは猶更ら面白い、何でも僕に對する一番槍だからね、はゝゝは」

ます〳〵恐縮の一番槍、無言の額越に岡田の顏を見上げて、この通りと自己の口の端を捻れば、貞吉さらに笑ひながら、

「冗談だよ君、つまらない眞似をするない、しかし問題は冗談でない、七人相談の結果、どう極めたかね僕の說を容れて當分は急かず騷がず臥薪嘗膽の覺悟で、いよ〳〵五厘會のため盡してくれるか、それに付いて第一まづ八人こゝに此まゝ唸ッて居ても仕方がないから、おの〳〵散彈的に別れて努力する事を、いかに決したか、お世辭のないところを露骨に聞かしてくれ、どうだ一番槍」

「さう君、皮肉に一番槍、一番槍と窘めてくれるなよ、僕は全體、かういふ好人物に出來てるからね、いつでも萬事お先棒の損な役廻りに使はれるンだ、例のビール瓶も令妹懸賞の一件も實は、考へたり企んだりした藝ぢやアないよ、只その場の調子で、うッかりついね、ひよこ〳〵と遣るンだ、はゝゝゝすまない、やッた後で直ぐに、すまないと思ッてる、決して君、いゝ心持になッちやア居ないよ」

「好い心持になられて堪るかい、はゝゝゝしかし君の性質には一種、僕の見た目に人の知

らない面白い點がある、今度いよ〳〵八人が別れるに仕ても、二人だけ一處にならうぢやないか、つまり僕は事に當ると聊か猛烈に熱し過ぎて、それがため動もすれば却ッて相手に自分の思はぬ意外の惡感情を與へる恐れがある、ところを幸ひ自然に何となく呵し味を含んだ君の恍け工合で調和して貰ひたいンだ、さうしても君は友達の過激を一轉せしむるだけの德を持ッてるよ、つまり早くいへば下熱劑のやうな人間だ、はゝゝゝ」

岡田の不在中は午後の三時過ぎより聊か遲くなりし夕飯の八時まで、凡そ四時間、さまざまの議論に入らざる無用の駄辯も交りしが、結局は異議なしといふ事に七人一致せしこ聞いて、いかにも心地よげの貞吉、滿面の微笑を浮べながら、

「どうせ氣に入らない點もあるだらうが、めい〳〵勝手な考へを個々に出して居ちやァ到底纏まッた働きは出來ないから兎も角まァ當分、さうして置いてくれ、わづか十人足らずの我々が下手に固まッて騷ぐよりも、つまり一箇所の工場に一人づゝ這入ッて屈せず撓ます加之も世間へ目立たず熱心に巧に、あくまで主義の宣傳者となり犧牲となッて說けば、一時の水を流したこは違ひ、砂地に自然に沁み込むやうなもンで、いつの間にか八個所の工場を我々の味方とするのみか、其また八個所の職工から他に及ぼす力は實に大きいぜ、いはゆる一波こゝに萬波を生ずる勢ひで、それこそ相手のためには汕陽大敵、とンでもない大事だが、もはや遲い、よけいな心配だが、お氣の毒に手後れだ、お まけに向ふ樣の手後れは此方の機先を制した譯で、そこに間斷なく例の五厘會が繼續して居ることすれば、今までのやうに十日か半月の兵糧攻に忽ち凹垂れて素寒貧の寄合ぢやアない、今度は一箇月に十八九萬圓づゝを積で來た實際の勞働問題だ、一年でも澤山だが、もし二年となッて五百萬に近い運動費がありやァ、我々の目的に必要の手段たる同

盟罷工も、こゝに始めて意義あり權威あり、實力あり、うか〳〵すれば、直ぐ目に物みせてやるだけの活躍が出來るンだよ、常に我々を壓するための飛道具に使用される治安警察法だッて、さうなれば、恐るゝに足らない、餘儀なく自然に消滅さす事も容易い藝だ、がまア當分、それまでの間は、わざと意久地なく默ッて負けてる方が最後の勝だ、どうしても時の來らざる今日は藥風呂にでも這入ッた氣で、暫く堪忍するより外アない よ、つまり資本家は多年の蓄へで有餘ッた矢玉を打出して來るし、また役人は自分の腹を痛めない官費で暢氣に喧嘩するものといふ事を君等、よく頭腦の中へ入れて置かないと、いくら議論が立派でも、詰らない目に逢ッて馬鹿な結果を頂戴するよ、この例は近來、わけて多く諸方にあッたぢやアないか、驀地に向へは何物にも捨身の岡田貞吉が今日、がらりと急に態度を一變したのも全くは、あまり馬鹿げて慘澹たる種々の實例を見たからだ、あまりに割の惡い無駄骨の結果を多々ます〳〵示されたからだ、いかに智慧を絞ッても、いかに工夫を凝らしても、鳥に羽翼がなければ飛べない、その日を働かねば食へない人間で第一の糧道を絶たれちやア無效だよ、手も足も出る筈がない、譬へば、ちよいと集ッて相談するにしても飯を食ふにしても、その電車賃や會場費や辨當代に差支へて困るやうぢや到底、歩調が一致しないし、ろくな藝も出來ないよ、五厘會、五厘會、眞理は簡單にして成功の基は口舌でない實行にあり、物價騰貴の今日、餅菓子一個も買へない五厘銅貨で我々の大なる目的は、たしかに達し得らるゝよ、これ以外に策略も方法もない、もし敵の目から見れば、バチルスの如くなッて各工場に潜み、その傳播力を四方八方へ擴げるンだ、これを說く上に於ては、惡魔の私語くが如くに人を引入れるンだ、かりに火災とすれば、始めより燃え上る焰でなく、糞の吹殼ぐらゐを塵埃の中

に埋めて置いて、いざといふや否、既に彼等の睡れる床の下ァ一面の火になるンだ、はッはッはッ、まだ僕としては具體的に饒舌りたい事も澤山あるが兎も角この邊で置かう、あとは總て一切、これからの不言實行だ」

いたるところ主義も目的も悉く異體同心なれども、時いまだ來らざる現在の共同生活を解いて、八人いづれも分離する事となり、おの〳〵緣を求め人を訪うて各工場へ再び身賣の相談に出掛けしが、わざと例の一番槍を引止めし岡田貞吉、

「君だけは僕と一緒にならう、きのふ言ッた通り全く君は僕の調和劑として、頗る適當の人間だ、もし外に好いところがなければ、當分まァ僕の女房役になッて居てくれ、僕は聊か考へた事もあるし、第一また川口電工に對する同盟罷工の發頭人として新聞へも出されたしいはゞ神經過敏な資本家のため札付の人間になッてるからね、さう急に口のある筈がない、寧ろ工場の外で自由自在に思ふ存分、うンと働く心算だ、決して外部に於ける秘密參謀といふ譯ぢやァないが、つまり内外相應じて通ずる策だよ」

「ぢやァ君、きのふの言葉は冗談でなく、ほンとうだね、僕だけ一緒になれといふのは、全くだね」

「全くだ、實際だよ、ちよいと君に惚込んだところがあるからね、はゝゝゝ」

「何だか變だな、うす氣味の好くないこッたたとひ間違ッたにしろ、例の袋叩きを遣る時一番の相圖にビール瓶を拋付けて、あり〳〵まだ其疵痕が殘ッてるからなァ、おまけに惡く洒落て妹さンを懸賞に出した野郎だ、外の奴の手前で手を出さないが、いよ〳〵二人となれば夜中に首でも締められるンぢやァないかね、それなら君、をかしく惚れずに

置てくれ、素直に謝るから今のうち遠慮さして貰ひたい、かう見えても、實は案外、一人になると臆病な人間だよ」

「はゝゝゝそこが君の何ともいへないところだ、さういふ工に恍け氣味の變ッた調子に惚れ込ンだンだよ、いち〳〵喧ましい面倒な小理窟を捻り廻す糞眞面目な奴よりは、よほど圖ぬけて面白く出來てる、大丈夫、安心しろ、もし復仇でもするなら、どうせ自炊だからね、お互の受持にせず事に據れば君ばかりに飯を炊かすかも知れないが、そのくらゐの覺悟で、ごうだい、始めて僕の考へを話すがビール瓶を抛げた勢ひ、あれも實は時と場合の相手次第で寧ろ痛快に感じてる、また妹を懸賞に出した洒落なンかア奇想天外、うまく使へば自然の當意即妙を得て殆んど外交的手腕の下地があるよ、もし君が一歩その調子を巧みに用ひ得らるゝやうになれば、いはゆる圓轉滑脱の人間だ、多數の上で大に遣らうとする裏面には、却ッて君の如き類を要する時があるから、是非とも君は僕と一緒に居てくれ」

「なるほど、表面の用には出せないが、ちよいと裏口から走らすには便利な奴と見込まれた譯で、つまり内證の小僧に使はれるンだ、はゝゝゝいや小僧でも何でも宜い、そりやア構はないが、いよ〳〵さうなれば今後、例のビール瓶だの一番槍だのと呼ぶのは止めて貰ひたい、これでも立派に田口彌太郎と戸籍面に載ッてるンだからね」

「承知した、これからア本名を呼ぶ事にする、しかし田口彌太郎といふ名を間違ッて聞くとビール瓶や一番槍よりも却ッて惡いぜ、田口彌太郎、たぬき野郎、よく似てるぢやないか、はゝゝゝ」

一時は殆ど炎々と燃え上りし會社の同盟罷工も、その火元といふべき例の八人を追出せし以來、案外に靜まり返りし體を見て、さらぬも今日の勞働問題を資本家に對する一種の火事場盜賊と等しく思へる川口傳兵衛、冷かに笑ひながら、偖こゝに笑うて濟まぬは我子の省三、うか〳〵すれば外よりも内に火の氣のあるが如く、動もすれば敵の導火線になりかねまじき恐れあり、されど兄弟もなき一粒種、怒りの餘りに叩き出されもせず、これを和らぐ方法は人情たゞ最愛の妻にありと、はや心當りを探せし父の傳兵衛、省三を我居室に呼付けて、

「どうだ省三、乃公のいうた通り、その後の會社は至極平穩で何の事もなからう、はゝゝは萬事あれさ、近來の同盟罷工なンか眞面目に此方で考へるだけの理窟も價値もないよ、いくら騒いでも捨てゝ置くに限るつまり、彼等は間違ッた平凡學者の切賣り説を夢に見て、それがため狼狽へた寢恍け騒ぎを始めるンだからね、かまはず捨てゝ置けば自然に目が覺めるンだ、生意氣に勞働問題といふよりも寢てるか起きてるか分らない朦朧問題といふ方が早い、もしお祭り騒ぎとすれば外の神樣でない、ありやア稲荷さンで狐に魔まれた藝だよ、はゝゝゝ」

いかにも得意に誇り顏の父を、ます〳〵不安の顏色に見上げし省三、

「お父さン、それは、お父さンの眼に映じた我會社の現在として、たゞ一時、ちよいと治ッたやうに見えるンですよ、決して社會の大勢ではありませン、無論また勞働問題の解決でも何でもありませンよ、たゞひ一部の職工は寢恍けても社會は寢恍けませンゼ、なるほど中には朦朧問題もあるでせうが、眞の意義ある勞働問題は、お父さン、はッきりと明白に押寄せて來ますぜ、自分の庭の小さい池に水が溢れないとしても、その家の後

ろに流れてる大きな川が氾濫すれば、やはり同じ水害を蒙るぢやアありませンか、寧ろ眼前に安心して用意のないだけに猶更ら以て大變ですよ、しかし今日まで幾度も、こンな事を申し上げてお叱りを受けるのみですから、もう一切、當分は何事も、いはないと極めて居ります」

「いはない方が宜い、お前の口で彼是いふぐらゐの事はね、さンざ苦勞して世の中の實際から今日この川口家を一代に拵へ上げた川口傳兵衛だ、隨分また油斷なく毎日の新聞なンかにも氣を付けて、自分の事業上に關する記事は細大洩らさず、他人よりも深く利害の點を考へてるからね、お前のいふやうな不用意でもなし、いくら社會の大勢だの何だのと騒いでも、出來る事と出來ない事を見分けて、輕々しく慌てないまでのこッた、もし慌てる時代が來ればね、慌てるよりも一歩お先へ御免を蒙ッて、さッさと平氣に引揚げる事を心得てるよ、はゝゝゝ心配するな、大丈夫、どンな川が溢れて來ても溺れたり、流されたりする氣遣ひはない、何時でも人の知らない舟の用意はある、加之も浮世の波瀾を凌いで來て泳ぎも世間の一人前以上、達者な筈だ、はゝゝゝそれよりも省三、第一お前の身を納めなければならない、今年二十六にもなッて、まだ獨身は困るよ、實は或、華族の令孃でね、心當りがあるンだぜ」

省三は胸板に槍を向けられたる心地、

「今いふ華族は省三、伯爵だぜ、加之も貧乏華族で借金に責められて苦しまぎれ、金持へ娘を遣らうとする例は世間に澤山あるが、それぢやアない、やはり相應に體面を保てるだけの財産ありながら、本人は同族よりも寧ろ時勢に適した實業家へ行きたいといふ希望らしいンだが、只こゝに一事、ちよいと不足をいへば、實のところ妾腹だ、しかし戸

籍面は立派に實子となッてる、つまり出産と共に直ぐ引取ッて、夫人の産ンだ事になッてるから世間體は何でもない、のみならず大變な美人で、教育も十分あるし、ことし二十歳になるが、どうだね」

凡そ世の中の女として省三の眼底に映ずるもの、お雪の外なく、まして華族の令孃といふ一言は豫ての主義に反するのみか、其お雪を刺殺す白刃の如くに感じながら、父の前、巧みに言葉を考へて、暫し無言の後、

「お父さん、その令孃は、なか〳〵感心ですね、つまらない形式的を人間の權威と心得てる華族で居ながら、加之も伯爵家に生れて、寧ろ時勢に適した平民の實業家を選ンだ工合は、よほど本人が出來てますね、所謂お姫さンでなく、これからの世の中を知ッてるらしい」

「全くだよ、第一また萬事に重々しい手數のかゝる昔風のお姫樣ぢやア此方が困る、ちよいと出るにしても御大層に芝居めいてぞろ〳〵餘計な腰元なンか連れ歩かれちやア遣り切れないよ、はゝゝゝところを幸ひ、さういふ工合に手輕く開けてるからね、もはや物質上に成功した川口家としては世間に對する名譽上、この上もない緣談だ」

「なるほど、さういへば、さうですな、どうせ、いつまで此まゝの獨身でも、居れませんから」

「さうとも、生活に困るとか或は他の事情に已むを得ない譯でもあれば兎も角、今日の川口家に生れた一人息子が二十六にもなッて、まだ獨身といふのは、何だか家の中に不吉な面倒でもあるやうに思はれて、いけない、實はね、これまで隨分、いろンな嫁を言ひ込ンで來たが、考へて居たンだよ、もう慌てゝ實を取る必要はなし、この上に取れば名

だ、名實こゝに揃ッて始めて川口家の地位も完備するし、お前の幸福も滿足に得られるンだからね」

「有難う御坐います」

「ぢやァ早速、極めた方が宜い、よく聞てるだらう巣鴨に屋敷を持ッてる青原こいふ伯爵で、當主は去年まで貴族院の議員だッたが病氣のため辭して、本人は照子こいふンだ、これはね、今年の春、ふと銀行の事で青原家の家令と知合になッて、それから段々、持ち上ッた談話だよ」

「はゝァ、青原伯爵、なるほど、ちよい〳〵名を聞きますよ、その令孃で照子、しかし感心ですな、いかにも將來の時勢を能く解してる」

「だから猶更ら、申分ないぢやないか」

「ところがね、お父さン、この省三も亦、多少は世の中の事に付て聊か時勢を解して居ますから、折角ですが、その緣談は謝ッて下さい、先方が華族に生れて平民の實業家へ行きたいと望むだけ、望まれた此方は平民の實業家に生れたるを幸ひとして、わざ〳〵何も殊更ら華族の嫁は迎へたくありませン、向ふも時勢を解すれば此方も時勢を解してるからこりやァ寧ろ却ッて時勢と時勢の衝突ですよ、つまり出來ない相談ですよ」

父の傳兵衛は不意を打たれて案外の顏色、暫し我子の顏を見詰めしが、おもはず膝を乘り出して、さらぬも元來の赤ら顏、ます〳〵赤めながら、

「省三、貴樣ァ近來、いち〳〵何でも意地になッて親のいふ事に反對するが、全體、ごういふ量見だ」

省三は殊更に落著いて、わざと靜に言葉を和げながら、

「お父さん、考へて下さい、子として親に向ひ、いち〳〵意地になッて反對しますかね」
「だッて現在、さうぢやないか、會社の事になれば資本家の立場で居ながら、いや社會の大勢だの勞働問題だのと、つまらない平凡學者の尻馬に乘ッて、わい〳〵騷ぐ職工の味方をするし、また自分の一身上に關して生涯の幸福を得させようとすれば、さンざ心配する親の苦勞を無にして、それも不足らしく謝ッてくれとは、どういふ間違ッた頭腦だ」
「さう仰しやると困りますがね、會社の事は例の八人を首にした以來、今までと違ッて何事も一切、いはないぢやありませンか、いくら申し上げても到底、お聞き入れがないンですから或時期に或事實の現はれるまでの間、當分まア默ッてる覺悟ですが、今こゝで嫁を迎へるといふことだけは、お父さン、さう急がず、どうか暫く、待ッて戴きたう御坐います」
「待つも待たないもあるか、今年もう二十六だぞ」
「わかッて居ります」
「わかッて居て何故、わからない事をいふンだ、外に兄弟でもあれば兎も角、今日かうなッた川口家の一粒種に生れて、それで濟むと思ッてるか、どうして華族が嫌だ、どうして伯爵が氣に入らない、お前は自分の嗣ぐべき家の地位も名譽も得たくないのか」
「お父さン、自分の嗣ぐべき家の地位も名譽も得たく思ひますから、わざ〳〵華族の嫁を貰ッたり伯爵と親類になッたりするには及ぶまいと考へます、第一お父さンが他人の力も借らず獨立獨行で今日この川口家を築き上げたとすれば、それが何よりも力强い地位でそれが何よりも立派な名譽で、今更ら華族に緣組する必要も利益もないぢや有ませンか、

もし此省三に時代後れの淺薄な卑劣な虚樂心があッて、是非とも華族の娘を貰ひたいと
いへば、大喝一聲、この馬鹿野郎と仰しやるべきこころです、青原伯爵の令孃として同
族よりも寧ろ平民の實業家に嫁したいといふのが全くの事なら、いかにも時勢を解した
ので本人には氣の毒ですが、解しられた此方は其華族たらざるを誇りとせなければなり
ませン、誰にも助けられず自己の力で得た富でさへ富の程度あまりに高く富の分量あま
りに多きに過ぎた場合、うか〳〵すれば獨占の出來ない事になるかも知れない世の中で
す、ましてや遠き祖先の餘光で僅かに現在の表面を保ちつゝある階級が何の名譽です、
どれほど鞏固な地位です、お父さン、士農工商といふ尊卑の甚だしかッた昔でさへ、そ
の身の大名に生れざりしを幸福とした人があるぢやありませンか、いづれの點より考へ
ても華族の嫁は嫌です、伯爵と親類になるなンか絶對お謝り申します、これだけは相濟

みませンが、お父さンに背きます、これがためどういふ、お叱りを蒙ッても構ひませン
妻は寧ろ、お父さン、寧ろ妻は、妻は寧ろ、自分より以下のものを、迎へたいと思ッて
居ります」
「省三、これほど親の心配してる事を貴樣、いち〳〵反いて全體、ゴンな心持がする、愉
快にでも思ッてるのか、つまり貴樣ア川口家に產れて、この川口家を呪ッてるやうなも
ンだぞ、會社の事といひ、一家の事といひ、まるで他人も他人、敵になッて向ッて來る
のと同じこッた」
「お父さン、理窟をいふ譯ぢやありませンが、呪ひだの、敵だのと、あンまり酷い事を仰
しやる」
「何が酷い、貴樣の方で理窟をいふンでないとすれば、乃公も自分の子に馬鹿々々しい、

喧嘩するンぢやないがどうして酷い、現在、さうだらう、まア會社の事は偖置き、折角、いろ〳〵家のためなり貴樣のためを思ッて考へた上、これならばと、實は自慢で勸めるほどの嫁を、まだ見も仕ないで、一言の下に嫌さは何だ」

「ですが、お父さン、外の事と違ひます、いろ〳〵御心配を下さるのは有難う御坐いますが、これは人間の生涯たゞ一度で、よほどの已むを得ない不幸のない限り、二度と再び遣り直しの出來ない事ですよ、また家のためなり自分のためを思はない奴さ仰しやるが、思へばこそ、一時お座なりの返答をせず、お父さンの御機嫌に反いても自分の腹にある通りを遠慮なく、ありのまゝに申し上げるンです、その本人を見も仕ないで謝るのは寧ろ先方に對する禮で、結局、お父さンと省三とは、その總ての上に於て根柢の意味が違ッてるンですよ、お父さンの世間へ向ッて名譽さか何とか思ッて居らッしやる、その世間も、その名譽も、實は悉く過去に葬られて仕舞ッたもので、なるほど、さういふ時代もあッたでせうが、これからの世の中は却ッて或意味の不名譽になるンですからねェ」

「馬鹿ッ、何かいふと貴樣ア直ぐ生意氣に過去だの將來だのと、紙の上に定規を當てゝ線を引くやうな事を饒舌るが、どンな事が何處までの過去で、これから前途、どういふ事が世の中の將來だか、わかッてるか、凡そ世の中で今日、誰が見てもね、はッきり間違ひなく分ッてるのは二十四時間を兩分した晝と夜だけだ、それも貴樣のやうな物事を履違へた頭腦では、狼狽へて曉方と夕暮と一緒に見てるかも知れない」

「はゝゝゝ」

「な何が呵しい」

「だッて、お父さン、あまり奇拔ですもの、日中の三十分や一時間は取違へる事もありま

すが、いくら狼狽へたにしても曉方と夕暮、まさか」

「いや、間違ッてる、間違ッてる頭腦だ、親の取る嫁でなく自分の迎へる嫁だから自分の考へ通り、自由にするこいふのが貴樣なンかの紋切形だらう、つまり妻は愛の結晶だとか、戀の目的だとかいふンだらう、結局、自己の氣に入らない事を悉く古いこして小兒の玩具を喜ぶやうに、たゞ新らしければ宜いと心得てるンだらうが、そこに飛ンでもない大間違ひの基が出來るンだ、しかし今こゝで貴樣と議論しても仕方がない、どうせ、いふ事を聞かない以上、暫く此まゝで見てるが全體、どンな女が貴樣、ほしいンだ、どッかに心當りでもあるのか」

この一言こ共に、睨まれし省三、はッと思はず不意に胸を突かれし心地、されど今は打明けて語るべき時機でなく、また打明けても到底それを許さるべき父でなしこ、わざと平氣を粧ひながら、

「別に、心當りも何も、ありませン、ある筈は御坐いませンが、先刻も申上げた通り、お父さンの華族といふ御意見に反して、この省三は寧ろ今日の川口家以下、つまり貧乏人の娘でも構はない、本人の性質さへ見込めば、さういふものを拾ひあげた方が却ッて家のため自分のため、よからうと思ッて居ますたとひ、此方は上に見なくッても、向ふが上から見下して來るやうな嫁に限ッて世間の實例、をり〳〵新聞にも出ますが、さッと何か面倒の起るもンで、うまく圓滿に納ッてるのは稀ですよ、それよりはね、お父さン本人に救ひ出されたとか見出されたこかいふ氣があれば、常に感謝の念が絶えませンから自然、何事にも辛抱して一家の幸福になるかと考へます、人間本位で實は丸裸でも宜い筈をいや、親里が立派だの荷物が多いのと、そンな馬鹿げた背景や嗚物入を自慢に要

ろものゝ氣が知れませン、いくら貧乏でも金持が娶れば金持の妻です、もし境遇上の餘儀なきため尋常だけで女學校へ這入れなかッたとしても、いはゆる其日の共稼ぎでない以上、自分の妻として教育する事は十分、寧ろ自分の考へ通りに出來るンですからね、をかしく變に出來上ッたり我まゝに育ッたりしたものを娶るのは、却ッて妻として後の煩ひですよ、どうしても省三は、初心で素直で、いはゞ性質の好い未成品のやうなものを迎へて、自分の妻は自分の妻たる理想に近く仕込ンで見たいといふ考へです」

省三は我を忘れて、おもはずお雪を眼前に押出すが如く、聊か惚け氣味を交へしが、俄に心付きて、

「しかし萬事、お言葉の通り、暫くの間、此まゝ見て頂きたう御坐います、無論、例の伯爵家は何卒お謝りを願ひます」

父の傳兵衛、これも今こゝで無理往生に押付け難しと、外に言葉なく冷かに笑うて、

「まるで貴樣ア、小説にでもあるやうな掘出物を探してるンだな、馬鹿々々しい、はゝゝはゝ」

その掘出物、探すに及ばず、現在もう既に掘出しましたと、いはれぬ苦しさ、心の底では莞爾としながら、

兄の貞吉が妹のため毒蛇の如く惡魔の如くに罵りし川口省三を、その後の態度一變、平生の我を折りて殆ど渡りに舟の如く說きしのみか、本人のお雪は猶更ら以前と變りて、いつしか穗に現はれし近來の風情、いよ〳〵と見て取りし父の久藏、

さらぬも重ねぐ〳〵の恩義に嬉し涙の折柄、迚も此まゝ浮ばぬ娘の身を助けらるゝ事、現在

の貧苦を救はるゝ自己よりも、猶更ら有難く、たゞ偏に我子の行末を祈るの外なく、今日も半粥に炊きし朝飯の箸を措くや否、

「ねェお雪、この五六日、お便りがないやうだが、どうかなすッたンぢやァあるまいか、こンな時、自由に伺はれる方だと宜いがなァ」

はや既に父の口より、他人でなき如くに問はれて、はッと今更に顔を赤めながら、かうなれば女といふもの、初心ながらも案外の大膽さ、それほどに驚きもせず、慌てもせず、

「だッて、お父さン、遊ンで居らッしやる方でないンですもの、いろ〳〵御用の都合で、仕方ありませンよ」

「なるほど、それも、さうだな、第一また御身分が御身分だから、かういふこころへは度度、入らッしやり慣いンだらう、しかし過日お前、銀座とかへ散歩に出かけた時は、車夫さンが使ひに來たぢやないか」

「あれはね、お父さン、お抱へでも何でもないンですの、どッか其邊の辻で、客待の車夫さンを、ちよいとお頼みなすッたンださうですよ」

「さうかい、道理で、お抱へにしては少々、まづい風だと思ッたよ、はゝゝゝ」

「お乘物は、自動車の外、ないンですもの、却ッて不便ですワね」

「全くだ、よくなり過ぎても人は時と場合で困るね」

「だから、わたしと一緒に散歩なンかなさる時は、お父さン今、暫くの間、目立たないやうにするからと、自動車にも乘らず電車で、入らッしやるの、過日なンか大變な人混で、ぴか〳〵光ッてる、お靴の先端が泥だらけ、さンざ踏まれたと仰しやッてね、ほゝゝほ」

「笑ひごッちやないよ、それほどまでに思ッて下さるンだ、おろそかに考へては濟まない、そして散歩の時なンか、ごういふ、お談話をなさるね」

「どういふ話ッて、別に、どうも、しかしね、お父さン、いつも必ず、きッと、お父さンの病氣を尋ねて居らッしやいますよ、それから兄さンの事も心配するなぞ、そンな談話ばかりですよ、わたし、わたしの事なンか、何とも仰しやらずに、たゞ散歩するだけですワ、それも、お父さンの知ッてる通り、晝間だけでせう、まだ三時間と過ぎた事はないでせう」

お雪この言葉に殊更ら念を入れ力を籠めて、そッと父の顏色を窺ひながら、

「ですがね、過日の時は、來年、十八になるまで、お友達だと、ほゝゝゝお父さン、西洋には、あるンださうですよ、をり〳〵只、散歩するだけの、お友達になッて居て」

「や、きれいに、さッぱりとした男らしい立派な方だね、なるほど、あの聞かない氣性の兄の奴め、打ッて變ッて折れた筈だ、今までは不運續きで可哀さうだッたが、お前は何こいふ幸福だらう、しかしお雪や、來年の十八になるまでが一番お前の身に取ッて大切なところだよ、その間に、それとなく、お前を試して見る御量見だからね、あまり付け上ッて馴々しく仕たり、お言葉に甘へて、よけいな物なンか買ッて頂いては、いけないぜ、わけて女は自分の身を顧みるといふ事が何よりの智慧だよ」

お雪の容色、お雪の性質に現在この親あるは、たとひ世間を忍ぶ戀にせよ、川口省三また何たる幸福者ぞ、

親子の談話最中、また今日も見馴れぬ車夫が尋ね來りて、白き横封筒を差置きしまゝ立去るや否、お雪は他人の事でもあるかの如く、わざと父に渡せば、開きし中に川口省三の名

刺一枚、裏に鉛筆の走り書、

上野のステーションにて待つ

手輕く只これだけの文字なれど、省三のためには戀の重荷さま〴〵の工夫に運びし業、

「お雪、今お噂してゐるところへ、これだ、早速、急いで行くが宜い、遲くなッては相濟まないよ」

せかるゝほど猶更ら急げず、

「お父さン、ちよいと用をしてから」

「何の用だい」

「まだ朝御飯の、お茶碗なンか、其まゝですもの」

「そンな事は宜いよ、歸ッてからでも出來るぢやないか、どこへでも自動車を飛ばして行ける方が、わざ〳〵上野の停車場で待ッて居らッしやるンだ」

「だッて、また過日のやうに、その邊の辻で知らない車屋さンをお賴みなすッたンでもあるンではないンですもの」

「理窟をいふない理窟を」

「ほゝゝゝお父さンに理窟なンか」

「段々遲くなるよ、少しでも早く、お前の方が先へ往ッて、待ッてるくらゐに仕なければならない」

「もし途中で、同じ電車になるかも知れませンよ」

「どうでも勝手にするさ、はゝゝゝしかし妙なもンだ、お前も近來は氣の勇む故か、なか

なか能く饒舌るやうになッたね」

「あら、お父さン」

「あらでも實でも宜い、早く行きな」

「どうしたのか、お父さンも近來は、をり〳〵面白いお洒落が出ます事ね」

「これでも昔、若い時があッたンだよ」

「まア」

久しく世の中に沈み果てし親子も、次第に浮ぶ心地して、おもはず笑ひながら、お雪の身仕度する間は無言のまゝに打守れど、その支度を終れば、また急立てらるゝ嬉しさ、戀人に待たるゝ身の猶更ら嬉しさ、

「お父さン、それでは、ちよいと往ッて來ても、かまひせンね」



父は起き返りし床の上に首肯いて、

「あゝ宜いとも、ゆッくり往ッて來な、そしてね、阿父が宜しく申しましたと、忘れるな」

「はい、さう申しませう、もし萬一、お晝になッたら、お父さン、すみませンが、朝の、お殘りで今日だけ、堪忍して下さいな、その代り何か、おみやげを、きッとね」

「おみやげ、入るもンか、さういふ事をすると、いけない」

「でも、お父さン、無理に持ッて歸れと、仰しやればね」

「仰しやるやうにしては、ならないぞ、なるべく萬事に御遠慮するのが結句、お前のためだ、わかッたかね」

上野のステーションに待合はして、人混の中より無言のまゝ立出でし省三お雪、わざ〳〵前

後に歩みながら、山の石段を上る時に始めて互の言葉、

「大森から歸ッた時は新橋驛で別れたし、今日は上野で逢ッたなンか、まるで宿なしのやうだ、はゝゝゝ」

此ごろのお雪、今までのお雪でなく、すぐに答へて、

「ほゝゝゝどこでも、かまひませン」

「どこでも構はないが、いつまで人混の中を幸ひ紛れても居れないよ、しかし新橋や東京驛は誰に目ッかるかも知れない、その段は上野の方が安心だ、第一この上野は、お互に紀念の山だからね」

「なぜで、御坐いますの」

「何故ッて、さうだらう、考へて御覽、この上野で例の、そら、お辨當こ鹽煎餅の取合から妙な工合で、かうなッたンぢやアないか、はゝゝゝあの時、不意に現はれて岡田さン今日お休みですかと睨んだ交換局の何役こかする人ね、あれは我々のため、さう憎くない人間だよ、何か持ッて禮に行かねばなるまい」

「往らして下さい」

「なアに本人が行くンだよ」

「いゝね、貴君」

「此方が、どういうて行ける」

「わたくしも、どう申して行くンです」

「さア困ッたね、ぢやア止さう、蔭ながら禮を言ッて置くとして、はゝゝゝしかし相變らず上野は靜で宜い、前に來た時よりは猶更ら茂ッて、おまけに前夜あの雨が今朝、晴れ

た後だから塵埃も立たず、何ともいへない心持だ」

「全くで御坐いますねェ」

「上野、氣に入ッたかね、ぢやァ上野に極めよう、實は今日この上野で、見せたいものがあるンだよ」

「あら、何で御坐いますの、博物館」

「いや、も少し新しいもンだ」

「動物園」

「まァ默ッて隨いて來るさ、なるほど、これならばといふよ」

「おや、向ふの木の間から大佛さまの頭、出て居りますよ、あれでも御坐いませンの」

「馬鹿な、あれは年中あゝいふ顏を誰にでも見せてる曝しもンだよ、はゝゝまァ默ッて



默ッて、今に見せるから」

獨り心の微笑を浮べし省三、お雪を伴うて、ぶら〳〵と歩み行く前より、五十あまりの袴を著けたる老人と十七八の小間使を召連れし令孃風、輝くばかり時代の流行に飾られたハイカラ式、いづれ馬車か自動車を何處にか待たせし境遇、

お雪は何ごやら照さるゝ心地して、わざと省三に離れしが、行違ひし時、その老人、ふと省三を見て丁寧に腰を屈めながら令孃に私語けば、令孃また顏を赭めて省三に目禮の會釋、心に覺なけれど、省三も帽を取りて禮を返せしまゝ三四間を行過ぎし後、おもはず振返りて小首を傾けながら、お雪を見れば、差俯いて低く小さき聲、

「見せて頂くのは、今の方で、御坐いますか」

今まで嬉しげに伴はれしお雪、急に足を停めて動きもせず、じッと其まゝ差俯いて、

「あゝいふ方を見せて頂きたう御坐いません」

この一言に聊か狼狽へながら苦笑ひの省三、實は心の底に例の青原伯爵それかと思へど、

「困ッたね、今のは全く、知らないンだよ、見たところ華族の令孃といふ風だが、實際、どこの誰だか、さッぱり分らない、あの家令めいた老爺が最初、丁寧に腰を屈めた樣子で考へると、あれが知ッてるンだらう、しかし物も言ッた事がない、隨分これで向ふばかり知ッて居て少しも此方の知らない人間が多いからね、をり〳〵こンな事があるよ、はゝゝゝ」

戀といふもの、すねるといふ事を始めてお雪に敎へしか、まだ其まゝ立停りて動きもせず

「さンざ、好いものを見せる、見せると仰しやッて」

「や、それは違ッてる、そりやァ外の事だよ、あンなものぢやァない、あれは此方の知らない不意打だよ、はゝゝゝ」

「でも、あの、お孃さま、お辭儀なさいました事ね」

「あれは、あの老爺が何か言ッたからだよ、つまり父とでも知合の間で、川口の子息だと聞かしたから、まさかね、すましても居れなかッたので、ちよいと會釋したンだらう、だが現代風の粧飾も自分の容貌を考へないで、あ・流行の看板式に飾り立てたのは却ッて何だか、いやな氣がするね」

「どうで御坐いますか、わたくしなンかに、わかりません」

「だッて、頭にも手にも、ぴか〳〵光ッてるのが目に付いたらう、あれぢやァ粧飾の意味を沒却して本人が空になッてるよ、夕方にでも出逢へば寶石が歩いてるンだからね、うか〳〵盜賊に目ッかると大變だ、攫み倒されるぜ、はゝゝゝ」

お雪も思はず顔をあげて、ほゝと笑へば、省三その機を外さず、

「まア兎も角も歩かう、さう同じ場所に立ッてると脚下へ根が生えて、なほ動けなくなるよ、しかし生きた美人が實際さういふ工合に動けなくなッたら、この上野は夜晝の見物で大騒ぎだらう、はゝゝゝ」

お雪また笑ひかけしが、二度も續けて笑はさるゝ事が何こやら口惜しく、固く唇端を嚙み締めながら、額越に省三を見上げて、

「もう今日は、これで、歸らして頂きます」

「どうして、そンなに御機嫌を損じたらうね、はゝア、わかッた、好いものを見せる見せると言ッて、まだ見せないからだね、こころへ唐突に、ミンだものと出逢ッたから猶更ら御不興を蒙ッた譯だ、ぢやァ見せる前に話さう、實はね、この上野の森をすぐ二階の眼前に見るところで、靜かな好い家を見付けてあるンだよ、無論、よからうと思ッてるが、まア氣に入るか入らないか見せた上で取極める事にする心算さ、もし嫌なら手金を損すれば何でもない、また外を探すからね、それがため實は今日こゝへ來たンだよ」

俄に立停りて動かざりしお雪、そろ〳〵歩み出せば、省三なほも慰め顔に振返りながら、

「わかッたらう、わざ〳〵この上野まで連れて來て今、逢ッた、あンなもの、誰が見せるもンかね、見せるものといふのは、家のこッたよ、はゝゝゝ實は、きのふ一日、人も使へず自分で探し歩いて、やッと目ッけたンだが、なか〳〵靜で宜いよ、二階が八疊と四疊半、下が八疊六疊で、たしか三疊に臺所が付いて居たらしい、小さくて狹いが當分まア親子二人と下女と三人ぐらゐには世間へ目立たず、却ッて氣樂だらうと思ッてる、竹の垣根で庭は五坪か六坪、こりやァ仕方ないが二階に坐ッて居て上野の森を見晴らすし、

不足をいへば汽車の通る音だけ少々、しかし直ぐ傍でなく、よほど離れてるから馴れゝば、さうでもなからう、あれは上根岸だ」

「あンまり、潔好すぎますから、お父さン、何と申しますか」

「何と言ッても、あゝ建て詰ッた棟續きの裏屋ぢやア病人のためにならいよ、のみならず、ちよいと散歩に誘ひたくッても、いちゞ〳〵知らない辻待の車夫を頼ンだり、不便で困る、第一あの路地を這入ッて行くのは氣の故か關所を通るやうでね、はゝゝゝまた今までと違ッて、出る方も出憎いだらうし、つまらない遠慮を仕なければならない」

「ほゝゝゝ全く、で御坐いますよ、あンなところに住ンでる人は、口の、うるさいもンで、いろンな事を」

「だからね、猶更ら至急、引移ッた方が宜い、氣に入れば今日、極めて仕舞はう」

「上根岸、この上野の、後ろで御坐いますの」

「さうだよ、昔はね、くれ竹の根岸の里と言ッて、杜鵑が啼いたり鶯の名所で、なか〳〵風流だッたさうだが、今ぢやア殆ど町續きに俗化してる、しかし何處かに名殘を止めて、まだ〳〵市中よりは閑靜だ」

「ですが、お遠いで御坐いませう、お邸宅からは」

「なアに、さうなれば、遠いほど却ッて愉快だよ、ぶら〳〵上野の山をぬけて來るなンか、四季ともに面白いし、急ぐ時は自分の自動車でなくても、タクシーはあるしね、電車は坂本の通りを走ッてるから、横に這入れば直ぐだし、散歩するにしても、人混の多い銀座や限りある紋切形の日比谷よりは、ずッと大きく自然の青葉に包まれるンだ、どのくらゐ暢氣か知れないよ、市中では人に笑はれるだけだが、冬の寒い時、二人で上野の山

を通りながら雪の中で轉ンだりするのも、他日の深い思ひ出になるンだよ、はゝゝゝ」

「あら、まア、ほゝゝゝ」

「ほンたうだよ、それからね、いよ〳〵家が極まれば是非とも電話の必要がある、たとひ用がなくも午前と午後と日に二度づゝは、きッと何か話す事にしてね、今、おまンまを食べますとか今これから便所へ行きますとか、そンな事でも構はない、顔を見なければ聲だけでも聞くンだ、はゝゝゝところで電話の懸け工合、知ッてるかね」

「存じません、電話なンか、懸けた事、御坐いません、ほゝゝゝ教へて頂かないと」

時いまだ到らず、暫くの間は八人おの〳〵分離こ決せし中に、岡田貞吉は例の田口彌太郎を伴うて、目黒の終點より芝の金杉橋に電車を降り、新網町の界隈を歩みながら、

「兎も角も六人は、どうなり、かうなり、それ〴〵藻潜り込ンで身體の始末を付けたから、まア安心だ、なア、たぬき野郎」

「おい君、たぬき野郎だけ止してくれよ」

「や、田口彌太郎というたンだぜ、たぬき野郎と聞えたかい、はゝゝゝ冗談は置いて、この邊を探さうぢやアないか」

「よからう、どうせ銀座や日本橋の中央で我々に二階を貸した上、無價で御馳走を仕てくれる家はないからねエ、やはり當分の間この邊の場末に巣を作ッて自前の土鍋飯を食ッてる方が氣樂で宜い、もし菜のない時は君、幸ひの品川浦だ、ちよいと海ッ端を彷徨いて蜊を拾ッて來ても濟むぜ」

「はゝゝゝ當分それも洒落てゐるが、下手な俊寛ぢやなし、いつまで海ッ端の貝を拾ッ

て居れるかい、たゞ一時の塒だ、塒末でも端ッくれでも人間の居處に構はず主義は主義で、あくまで社會の中心點を覘ッて奮鬪するンだからね、その覺悟で居ないと困る、たまには土鍋飯の焦付くのも知らないほどに考へて居なきやア無效だ、片手に時計を持ッて片手に卵子を持ッて半熟を拵へる時、間違ッて時計の方を鍋で煮たといふ發明家もあッたからね、それくらゐの熱心にならないと、迚も遣れない敵手を控へてるンだ、つまり斧も鋸もない丸裸の空手で、多年の根を張ッた大木を倒さうといふンだ、しかし倒せるに極ッてる、いくら幹が太く根が深くッても地軸に通ッてる筈なし、小兒のやうに指頭で土を掘ッても大勢が氣を揃へて長く懸れば、きッと押倒すよ、はゝゝゝゝ例の五厘會を讐へて見れば、どうせ立派な晴著ぢやアなし、めい〳〵差支のない襤褸著物の裾の方を少しづゝ裂いて、これを糾合した大綱で引倒すンだ、しッかり仕ろ、たぬき」

「また君、たぬき、人間の惡い癖が付いたね」

「はゝゝゝなア、おい田口、たぬき、どうしても紛らはしいね」

「よし、ぢやア以後、仕方がない、たぬきでも宜いからね、その下へ彌太郎を野郎と付けずに置いてくれ、同じこッて、たぬき野郎は少々、酷過ぎる、はゝゝゝ」

「面白い、そこが君の出來てるこころだ、七人の中で乃公の見込ンだのは其處だよ、外の奴なら眞面目臭ッて怒るが、怒らないにしても變に嫌な面で膨れるところを、たぬきで宜いと承知した工合、いかにも恬淡で、あッさりと面白い、ぢやア野郎だけ遠慮して置かうね」

「つまらない事を面白く見込まれたもンだ、は、、、、や君、あの向ふの家に二階貸の紙が張ッてあるぜ」

凡そ世の中に人間の運命ほど不思議に分、この日お雪は省三に伴はれて上野の森影に樂しく嬉しき戀の棲家を見付け、兄の貞吉は暫し假寢の塒を求めむため、たぬき野郎を伴うて芝の新網町を　うろ〳〵、

芝の新網町に貸二階を見付けて、岡田と田口の二人こゝに一時の塒を定めしが、月に五圓の室代といふよりも寧ろ屋根代、たゞ雨露を凌ぐのみ、六疊の一室に破疊の數は五疊、殘る一疊分の半は床板のまゝ半は梯子の上り口、押入も戸棚もなく天井を張らず三方は荒壁、西向の前に三尺の窓たゞ一個、田口は今更に首を捻り廻して、じろ〳〵と四邊を見ながら岡田に向ひ、

「どうだい君、承知で這入ッたンだから不足をいふでもないが、これで月に五圓は隨分、





酷いなァ、かういふ塲末の物置二階まで生活難と共に住宅難が押寄せて來たンだぜ、こ

こ二三年前なら二圓が、せい〳〵關の山で一圓五十錢ぐらゐの相塲だが、ごし〳〵遠慮のない物價騰貴のため、おひ〳〵人間が鼠の運動塲へ侵入する譯だ、はゝゝゝ第一こンなところへ古疊を並べて錢を取ッて人に貸すなンて、づう〳〵しい奴だよ」

窓の外を眺めし岡田貞吉、苦笑ひのまゝ振返りて、

「愚痴をいふない、貸す奴よりも借る奴の方が多い世の中だよ、これでも一日か二日、後れて來りやァ先客樣が居据ッてるだらうよ、まアどうでも宜いさ、當分こゝを塒として、高く大いに飛ばンがための羽翼を收めながら雲行を見るンだ、君とすれば暫くの間いはゆる狸寢をするンだよ、をり〳〵は洒落て腹鼓も打てよ、はゝゝゝ」

「しかし、三方壁に西向の西窓たゞ一個で、段々これから夏になれば眞正面に西日を受け

て狸寢入も出來ないよ、おまけに昇り降りが危險だ、ありやア君、どッかの古梯子を持ッて無理に立懸けたンだぜ、つゝぬけに裏表なしの横桟と來てるから、うか〳〵すると足を突ッ込ンで股を擦り剝くし、夜半に寢恍けた時は調子よく轉げ落ちるやうに出來てる、加之も土鍋飯の蓋を取る時なンか、よほど氣を付けないと天井から煤が舞下るといふ工合、油斷のならない家だ、はゝゝゝ」

「なアに梯子や煤は用心して濟むが、今の社會は君、油斷も隙もあッたもンぢやアない、ちよいと間違へば、すぐ或意味の白刃が向いて來るよ、それも一思ひに男らしく突いて來ない、まづ臆病な奴の胸元を覗ッて、さンざ威喝かした後、殘ッた奴を四方八方より包圍攻擊で、じり〳〵と弄り殺しにするンだからね、加之も傍杖を恐れて死骸の引取手がないといふ慘酷な世の中だ、よほど考へて掛らないと無效だよ」

こゝに塒を定めし其日の晝は面倒なりとパンを嚙り、土鍋炊の夕飯に始めて茶碗と箸を持ちし岡田貞吉、女房役の田口彌太郎に向うて、

「ねエおい、目黑から持ッて來た此米は、どのくらゐ殘ッてるかな」

「もう僅かだよ、そこにあるボール函に半分ぐらゐだから、やッと二升あるかないかだ」

「ぢやケ、ざッと三日分だな、今までは八人一緒で多數決だッたから默ッて居たが、いよいよ二人になれば、うンと上等の米を食はうぢやないか」

「や、急に奢り出すンだね」

「なアに奢るンでないよ、實は儉約するンだ、何故ッて、よく考へて見ろ、凡そ今日の世の中で米が一番に廉いンだぜ、たゞ米は一日も缺くべからざる常食物たるが故に、貴賤貧富ともに無くて叶はぬ必要物たるが故に、少しでも値が騰ると直ぐに騷ぐし、また世

界的の食糧問題から押して來て、到るところ喧しい議論にはなッてるが、米といふものの實際は騰る時よりも廉くなり過ぎた時が大變で、ほンたうに社會の衰弱を來すンだよ、米の騰い時は愚痴を零しながら一方に稼ぐ仕事があッて油斷なく緊張してるし寧ろ貧乏人の暮しは樂だが、米の最も廉い時に怠け者が出來るし稼ぐ仕事が無くなるし却ッて饑死する奴の多い證據を示してるよ、加之も米は諸物價騰貴の最後に騰るもンで米が諸物價を引上げた例は殆ごない、それに外の物を捨てゝ置きながら只この米を目の敵に、いや調節だの食ひ延ばしだの混合食だのと、慈善屋の口上めいた人聞の好い事ばかり幾何どう騒いだッて無效だ、年々に人口增加の結果、日夜の活動增進の結果、どうせ日本で出來る米が日本の人間に足らなくなッてるンだから、外米を入れるにしても拙い役人の藝當や、迂遠な學者の空論や根本に觸れない政治家なンかの手腕で、をかしく下手に騒けば騒ぐほど米の無い事を裏書して、ますゝ〳〵奸商の煽り策に乘せられ、產地の農家は賣惜むし市中の米俵は羽が生えて飛び上るンだよ、はゝゝゝ外の物は足らない時に出て來るが、米ばかりは譬ひ有り餘ッて居ても無いといへば姿を隱すもンだ、そこで餘儀なく値が米を呼び寄せるより仕方がない、過日もいふ通り口に這入るものは按摩の笛も高くなる時節に米の高いのは當然だ、また人の口に食はれながら人の口でいふ通りにならないものは米だよ、はゝゝゝこの米に付ては岡田貞吉、例の勞働問題と密接の關係を有してるから、たしかに机上の空論でない實際の本氣に考へてる事もあるが、そりやァ別として、ねエおい田口、鹽を舐めても味噌を舐めても宜い米だけは二人で上等を食はないと損だぜ、外に贅澤するぢやァなし、いくら食ッても日に一升飯を食ふぢやァなし、只これを唯一の娯樂とし唯一の活動原料として、いはゞ汽車汽船の石炭だ、わづかの値

が違ッてゐため粗悪な石炭を燒いちやア進行力が鈍ッて結局、差引勘定に合はないよ、うンと美味い米を食ッて、うンと働かうぢやないか、現在に於ける我々の境遇として天下の富豪に負けず劣らず同一の程度を保ち得らるゝものは米だけだ、彼奴等の眞似をしたくもないが此方の身體に取ッて第一の必要だ、また彼奴等と戰ふべき前途の延喜にもなるよ、はッはッはッ」

生きた身體を時間貴の器械扱ひにせられし電話局も辭し、うき世の底の薄闇き裏長屋も去りて、上野の森を見晴す上根岸の二階家へ移されしお雪は、夜の明けたる心地、如之も金は金ながら金の爲に囚はれ金の爲めに放さるゝにあらず、うれしき戀人の情に包まれて樂しき行末を誓はれし身、

「ねエお父さン、わたし全く、びッくり仕ましたワ、この家は御一緒に來て、見せて戴きましたから、さうでもありませンが、こゝへ移ッて來た其日に、お父さンの敷蒲團も夜着も、わたしの分も新らしく出來て居て、それを不意に持込まれたンですもの、ちやンと前から日取を考へて御註文なすッたンですねエ、おまけに此邊は蚊の出るのが早いからッて、あンな立派な蚊帳まで」

かうなれば我身に餘る嬉しさを父に向けて聊か戀人の自慢も交り、あとは獨言のやうに、わざと不足らしく、

「あンまり、お氣が付き過ぎて、よけいな事までなさるンだよ」

父の久藏は新しき敷蒲團の上に起直りて、じろ〳〵今更に四邊を見廻しながら、

「勿體ない事をいふよ、折角、いろ〳〵と御心配して下さるものを、よけいな事だなンて

冗談にもお前、そンな氣を出しちやア罰が當るぜ、まア考へて見ろよ、かう何から何まで潔好に仕て戴かなくッても、この半分で、もしこれが外の人なら第一お前の身體、さうぢやアない、すぐ此まゝ妾宅にでもなるのが世間の普通だ、ところが微塵、さういふ素振もなさらず、まるで御自分の妹でも持ッた氣で居らッしやるよ、はゝゝゝよく新聞にもあるだらう、わづかな義理に弱いものを責め落して、いやな事をする奴の多い世の中に、ま何といふ、さッぱりした、きれいな方だらう、どンな事をしても、御恩の報じやうがないぜ、お言葉のあッた來年までは、お前を、いろ〳〵と試して御覽になるンだから、その氣で、うッかり出來ないよ」

「ですからね、お父さン、わたし、やはり今まで通り、御飯を炊たり洗濯も仕たり猶更ら一生懸命に働く心算ですが、それでは、いけないと仰しやるンですの、若いものが使ひ慣ければ年の取ッた婆やでも是非、一人は置かないと萬事に不便だし、この家で父子ただ二人は淋し過ぎるだらうと、こンな時に、おッ母さンでも居たらばねエお父さン、どンなに都合が宜いでせう、かはいさうに、おッ母さン苦勞死だッたンですね」

父は思はず老の顔を反けて、

「仕方がない、あゝいふ不運で、あゝいふ壽命だッたンだよ」

「ねエお父さン、わたし等ばかり、かう潔好に仕て戴いても、すまないやうな氣が仕ますから、せめて、おッ母さンの、石碑を立てたいと思ッてゐますよ」

「たゝ立てゝやッてくれ、乃公は、意氣地なしで、それも出來なかッたからね」

「いゝえ、お父さンの事をいふぢやアないンですよ、わたし、かうなッて、わたしが立てなければ、すまないンですからさ、お父さンは何でも直ぐ、自分を持ち出して、わたし

を困らすンですよ」

「もう乃公は、これから口を出さないからね、よろしく頼むよ」

「それが第一お父さン、いけないの、自分の子に頼むといふ事がありますかね」

「ぢやア頼まないから、勝手に仕てくれ」

「勝手になンか、出來ませンワ」

「ぞういへば宜いンだい」

「ほゝゝゝわたしがね、いち〳〵相談する妻に付いて、いけないとか、よからうとかお父さン指圖さへすれば、それで宜いンですよ」

うれしき中にも涙あり、父子は互ひに顔を見合して、おもはず互ひの泣笑ひ、

外に人なけれど、父は思はず聲を低めながら、我子の顔を哀れげに差覗くが如く、

「ねェお雪、かういふ事を今お前に、わざ〳〵、いふのも變だが、こりやア親馬鹿といふ心配でね」

「何ですの、お父さン、あらたまッて」

「なアに別段、改まりも仕ないが、つまり人の運といふものは惡い事も續かない代り、また善い事も、さう長くは續かないもンで、いつ何時、どンな事が出來るかも知れない、第一この乃公の心配になるのは、あの方の身分と、此方の我々と、あンまり違ひ過ぎてるよ、いくら御本人が何と仰しやッても、ことし二十六におなりなさるンだらう、まして外に御兄弟方がないンだから猶更の事、親御は勿論、傍で捨て〻置く筈がない、どうせ、どッからか、奥樣が來るものと思ッて居なければならないぜ、さア其處だ、もしそれを御本人が聞かないといへば、いろ〳〵と詮鑿の果に、お前の事から一騒動が起ろし、

先様が無事に濟めば、お前が影で泣くだらうしね、どうしても世の中は昔からいふ通り、まゝにならないもンだ」

お雪は顔を赤めながら、わざと輕く笑うて父の言葉を打消し、

「お父さン今から、つまらない心配をしてさ、そンな事を、わたし、そンな事、どうでも宜いンですよ」

「どうでも宜いで濟めば潔好だが、偖その場になると、外の事と違ッて、さうは行かないからね」

「まア、お父さン、つまらない取越苦勞ばかり、ほゝゝゝあの方はね、お父さン、世間にあるやうな、そンな薄情な」

「わかッてる、いはなくッても、そりやア十分、わかッてるから猶更ら心配するンたよ、たとひ半年でも一年でも、かうして戴く御恩だけで澤山だ、それを忘れないで、どンな事があッても、お前を罪の深いものに仕たくないのが乃公の願ひだよ」

「わたし、お父さン、罪の深い女に、なりますかねエ」

「なるとは、いはないよ、いはないが自然、先様に取ッて、さうならないやうにするのが、せめて、此方の御恩返しだといふンだよ、どうせ日蔭の花だからね」

なるべく父の言葉に反かず、なるべく父の心を慰めしが、罪の深き女になるといはれ、どうせ日蔭の花といはれしお雪、あまりの口惜しさに戀の一念その平生を忘れ、おもはず小膝を進めながら、いきくと張切る目元を濕ませ、

「お父さン、いッそ、今の内、この家を　止して仕舞ひませうか」

「なゝ何故だ、どうしてだ、折角かうして下すッたに」

「わたし、考へましたよ、いくら潔好にしていたゞいても、どンな立派な、お醫者樣を呼ンで戴いても、こゝでは十分お父さンの養生も出來ませンから、癒るまで、どッかの病院へ這入ッて、わたしは、私で亦どッかの學校へ這入ッて、年も恥も構ひませンワ一生懸命たゞひ、死ンでも構ひませン、一生懸命に勉强して、さうすれば、これでも、お父さン、さう世間へ遠慮しなくッても宜いやうになるか知れませンからね、わたし、これを、お願ひすれば、二年でも三年でも、五年でも、聞いて下さる方です、きッと喜ンで、さう仕ろと仰しやる方なンです、その間、あの方も、お父さン、きッと御獨身で居らッしやるに違ひないンです」

呆れし父の顏を、何とやら恨めし氣に見ながら、やう〳〵我に返りしお雪、

「お父さンは、何にも知らないで、前途の心配ばかり、仕て居なさるンだよ」

會社の事には一點さらに我意見を用ひられず、口を出す毎に是も非もなく叩き潰され、生涯を伴ふべき妻帶の事には猶更ら手嚴しく親といふ字を振り廻され、否應なしの無理往生に押付けられむとして、ます〳〵面白からぬ省三、其面白からぬ心の不平滿々は、ますます人目を忍ぶ戀に募りし上野の山越、

鶯坂を降りて汽車の線路を横ぎり、櫻木町より左に折れて二曲りの三軒目、流石まだ根岸の名殘を止めし竹の垣根に古き椎の木の蔭、小き潛り戸の門を入れば、こゝへは誰も來ぬ筈の足音に、それと知りしお雪、慌てゝ襷を外し、前垂を横に挿みながら臺所口より立出でし顏を見れば、はや何事も忘るゝ省三、

「やア大變な勢ひだね」

「ほゝゝゝちよいと今、洗ひ物を仕て居りましたの」
「まだ婆やも何も目ッからないかね、どッか近くの口入屋へ頼ンで、急けば宜いに」
「外に、用が御坐いませンから」
「用がなくッても、さうした方が萬事に便利だ、もしいふ事を聞かないと、困るやうな用を拵へて持ッて來るよ、はゝゝゝ」
「ほゝゝゝどンな御用でも、困りませンワ」
「なるほど、同胞だ、兄さンに似て案外、强情なところがあるよ」
「まア酷い事」
「なアに冗談だ、はゝゝゝ時に今日は二階へ上ッて、上野の森を見晴らしながら一時間ばかり遊ンで行きたいが、上ッても宜からうね」

お雪は自然に覺えし戀の目、じろりと睨むが如く、
「お惡う御坐います、いつまでも其處に立ッて居らッしやいまし」
言ひ捨てゝ入口の障子を開け、わざと其まゝ内に入れば、立話しの聲に父は臥したる六疊の襖を閉め、その隙間より片手に招いて、
「何故お前、あンなところでお話しするンだよ、早く、お入れ申さないか、乃公は見苦しいからお目にかゝらない」
「だッて、いろンな事を仰しやるンですもの、二階へ上ッても宜いだらうか、なンて」
「つまらない、何を言ッてるンだ、兎も角お二階へ、さア早く、お茶の湯が沸いてるかい」
「生憎く、ぬるいンですよ」
「ぢやァね、お上りになッてから、そッと乃公が沸かさう」

「いゝへ、わたし仕ますよ」
「お前が降りたり上ッたり仕ちやァ、いけないよ」
「そンな事、少しも構はない方なンですから」
「默ッて親のいふ通りにするもンだよ、動けない病人ぢやァなし」
頻りに父子の私語くを、わざと聞かぬ風情に入りて、二階への梯子段に足を掛けながら、
わざと見ぬ振りに父への一言、
「どうですね病氣は」
その聲に振り歸りて立ちしお雪、
「おかけさまで大變、こゝへまゐッてから宜しう御坐いますの」
「そりや宜い、ゆッくり後で、お逢ひ仕ようね」

父の久藏は閉ぢし襖の中にて、丁嚀なる無言のお辭儀、
人の知らざる山の奥よりも、都の中に却て浮世の隱れ家は深く、二階の窓越に上野の森を
見晴らしながら、お雪に向ひし省三、
「たまらないね、かうして見た工合は、家は粗末で小さいが景色は自然で大きい、わざわ
ざ建て込んだ市中に馬鹿な金をかけて高い塀を廻らして庭を拵へる奴の氣が知れない、
夏になれば、あの森の陰から來る風で凉しからう、春は勿論、ちら〳〵花が青葉交りに
見えるし、秋は月で夜は蟲の音もするだらうし。雪は猶更らね、第一また暢氣だ、かう
して居りやァ蒼蠅い事を聞かず面倒な奴にも逢はず、もう世の中が嫌になッて來た、誰
が何と言ッても構はないから、いッそ此まゝ這處で社會の無用の人間となッて仕舞はう
かね」

我身を倒すが如く壁に背を當てゝ兩脚を投げ出し、平生の微笑もなく溜息を漏らせば、いつにない事と、おもはず眉を顰めしお雪、そッと差覗くが如く、

「今日は、どうか、なさいましたの、御氣分でも、お悪いのでは御坐いませンか」

抛げ出せし兩脚を俄かに縮めて、片手を打振りながら、

「なアに、どうもないッ、ないがね、つまらない事で絶えず忙がしい中から、かうして、こゝへ來て見ると、あンまり暢氣でね、つい、そンな心持になるのさ、はゝゝゝ實は景色ばかりでないよ、そこに、さういふ氣を出させる人が居るから、いけない、困ッた人と知合になッたね」

お雪の顰めし眉も開いて、わざと上野の森へ顏を向けながら、

「さう、お困りなら、やはり元の小田原町へ戻ッても、よう御坐います、その方が身分相應ですから」

「おッと、あぶない、うかゝ物をいふと、すぐ近來は御機嫌を損ずる、どうか電話局なンかへ御再勤なさらず、こゝに居らッしやるやう只管お願ひ申します、もし此處が御意に入らねば、いづれへなりとも、お指圖の通り引移りますから、はゝゝゝこの位お世辭を使ッて置けば大丈夫だらう、まだ足らないかね」

「もう澤山で御坐います、窘めてばかり居らッしやるンですもの」

「なか〳〵お窘め申すどころか、びく〳〵してるよ、まるで腫物に觸るやうだ、はゝゝゝは」

「あら、こちらが、さうで御坐いますよ」

「なぜ、萬事、かう下手に出てるがねエ」

「だッて、をり〳〵變な事を」
「變な事、どうして」
「御機嫌を損じるの、お指圖だのこ」
「はゝゝゝ冗談だよ」
「いくら冗談でも、程度が御坐います」
「や、また失策ッた」
「ほゝゝゝ失策ッて、ばかり居らッしやる事」
「以後、心得ます」
「全くで御坐いますよ、御冗談にしても、あンな事を仰しやるこ、もう、お目にかゝれませんから」



「さア大變だ、さうなると此方の生命がない」
平生は世間に向うて眞面目なる省三も、戀のために我を忘れしか、聲を潜めながら、
「人殺しいッ」
お雪は横腹を抱へて、これも父に聞かせじと苦しげの忍び笑ひ、階下より省三を憚りながら父の小聲、
「お雪、お雪」
呼ばれて二階より降り行く後姿を、花の裏みる心地に見送りし省三、耳を欹つれば、ひそひそと私語く中に聊か癇走りし父の聲、間もなく上り來る顏を待ち受けて、
「はゝゝゝ何か、叱られたね」
「病人のくせに、よけいな事をして困りますの、わざ〳〵寢床から這ひ出して、お湯を沸

かしたり、お茶を入れたり」

「そりやア氣の毒だ、そンな事を病人にさしては、すまないよ、だから早く婆やでも傭ッて置かないと、いけないンだ」

「いゝえ、それは宜いンで御坐いますが、小田原町から持ッて來た、きたない、お土瓶で、お茶碗も古いし、第一お番茶ですもの、今度、入らした時に新らしいので差上げると、いひましたの、するとね、さンざ洗ッて鹽じ磨いてあるンだと、ほゝゝゝをり〳〵頑固で」

「何が頑固なもンか、却ッ恐縮するくらゐだ、洗はなくッても、磨かなくッても潔好、且お茶を貰はう」

「だッて、もう、さうして仕舞ッたンで御坐いますよ」

「どう、どうして仕舞ッたね」

「今日だけはね、お茶も何も、さし上げない事に」

「いや、是非とも貰はう、急に飲みたくなッた、大變に咽喉が乾き出したよ、あゝ飲みたい」

「まア意地の、お惡い事、今まで何とも仰しやらないでさ、また降りて御覽なさい、それ見ろと二度も小言をいはれますよ」

「二度でも三度でも叱られるが宜い、もし嫌なら此方が降りて行くよ、ついでに御飯も食べよう、今日の、副食物　何だッたね」

「では、降りて戴きませう」

「よし來た」

わざと俄に身を起せば、慌てゝ二階の降口を立塞ぎ、振り返りて半笑ひの眉を寄せながら、上野の森の日影をうけし顔、

「かうなると、上と下とで、兩責に逢ッてるやうなもンです事、ほゝゝゝ」

省三、起せし身を横に倒すが如く、ころりと寢ながら肱枕、

「こンな馬鹿な事を言ッたり、ふざけた眞似を仕たり、まるで小兒のやうに社會といふものを忘れてる間が全く、人生の幸福だらうね、努力だの奮闘だのと騒いで爭ふ黄金も名譽も、かうして、この二階から見ると案外、つまらないもンだ、はゝゝゝいッそ此家の養子になりたい、毎日大勢の膏汗を絞ッて眞ッ黑な煤煙を吐出す工場や、監獄のやうに高い石塀で圍まれた用心堅固の邸宅なンか、しみ〴〵嫌になッて仕舞ッた」

芝の新網に塒を定めし岡田貞吉、大胡坐のまゝ壁に背を持たせて兩腕を組み、をり〳〵兩眼を閉ぢたり開いたり、口を一文字に固く結びしが、その固く結べる口よりも、をり〳〵漏るゝ舌鼓、ちよッ、ちよッ、

女房役の田口彌太郎、半疊の板敷に畫の土鍋飯を炊きながら振り返りて、

「どうしたンだ君、けふは大變、むづかしい顔を仕てるね、おまけに牛か馬でも居やァ仕まいし、ちよッ〳〵と全體まァ何だい、よほど氣に入らない事があると見えるね、もし僕が嚊アなら横面の一撃ぐらゐ　食ひさうだね、はゝゝゝ」

「馬鹿な事いふない、嚊アを擲るやうな時は、擲らずに黙ッて、そッと出すよ」

「もし出なければ、どうする、づう〳〵しく女の尻の据ッたのは君、なか〳〵急に動かないもンだぜ」

「いや、いくら動かない嚊ァでも、出さなければならない場合に出さうと決心した以上、わざ〳〵擲るに及ばない、出るやうに仕てやれば出るよ、出られないやうにするから出て行かないンだ、女の尻なンか、どンなに重くても昔から石臼ぐらゐの通り相場だ、もしあれが全部、鐵でも知れたもンだよ、はゝゝゝ冗談は偖置き、自分の連添ふ嬶ァの尻でも下手に扱へば、其まゝ居据ッて、動かせないンだからなァ、當然だ」

「な何が當然だ、談話の具合が變だね」

「當然だよ、あゝいふ遣り方ぢやァ迚も相手を動かせない、サボターヂュといふことは外國に多少の效果もあるだらうが、きび〳〵したところに男子的の生命を持ッてる日本人に蛇の生殺しを見るやうな、そンな卑怯な藝當で、何が出來るもンか、業を怠けるくらいなら未練氣なく其業を止めて、さッさと去るが宜い、男らしくもない、すねたり曲ッたり思はせ振で目的を達するのは、鼻の下の長い旦那に對する藝者か女郎に限るンだよ、はッはッはッ」

「や、今度、例の工場に出來た例の怠業騷ぎかね」

「さうだよ、立派な正義を有したストライキでさへ現在に於ける今日の我資本家に高を括られて、いつも同じ兵糧責の一手に遣られてるンだからね、此ストライキを將來、いかに有效ならしめ、いかに實力を含ましめ、いかに敵の急所を突かうかと苦心慘澹の最中、あのサボターヂュを聞いて、や、仕舞ッた、ミンでもない馬鹿な眞似をしてくれたと思ッたよ、一個所で一萬人以上の職工といへば、つまり我國の勞働者全體に影響して天下の耳目を欹てるからね、よほど愼重の態度で强硬の決心で尠くも數十日間を對抗すべき用意なくては無效だ、その大切な責任の重い事を、あゝ輕々しく加之も第三者の同情を

失ひ易き怠業手段を取ッたのは實に智慧のないこッた、今後に對する我々のため遺憾に堪へない、始めから此岡田は、あの試驗を危ンで居たよ、迚も及第すまいと睨ンで居たよ、落第するに極ッてると思ッて居たよ、まづい時に不用意な試驗を受けたもンだ、折角あゝして一萬人以上も團結するなら、も少し巧い考へがあるンだに、惜しい事して仕舞ッた、これで全國の職工に差響いた遣り損ひが二度目だ、數に於ては小さいが最初の一度は、勞働問題に最も將來の味方とすべき社會的、或機關に向ッて、ちよいと沸湯を呑ましかけた事があるからな、この不利益が大變だ、それに今度の怠業一件、相手が大きくて人間が多かッたゞけ猶更ら、まづい事が世の中の目に立ッて、是からの我々ます〳〵遣り憎くなッたよ、しかし岡田貞吉それがために凹垂れない、彼等が二度の遣り損ひを寧ろ此方に取ッて、あべこべに面白く利用する一策がある、おい、たぬき、も少し隅へ寄れよ」

大胡坐　兩腕を組みし岡田貞吉、なほも言葉を續けて、土鍋飯を炊く焜爐の前に團扇片手の田口彌太郎を振り返りながら、

「全體サボタージュなンか、わざ〳〵今この日本で物珍らしく始めるに及ばないよ、これが時間責の器械的に使はれる筋肉勞働の職工だから、ちよいと怠けて直ぐ目に立つが、實は官省でも會社でも商店でも何處でも、到るところ惡い習慣で、だら〳〵と遊び半分に仕事を遣ッてる工合、また三人で十分に出來る事を五人も六人も掛ッてる工合、つまり勤勉といふ事を能率の上に量らずして毎日たゞ休まずに身體さへ出て居れば宜い事になッてる工合、立派なサボターヂュだ、は〳〵〳〵この點から考へると、今度あの一萬人以上で殊更にサボターヂュを標傍したのは結局、自分等の男らしくない事を第三者たる

世間へ現はして同情を失ッたのと、どこにも平氣で遣ッてる怠けもの〻總勘定を背負ひ込ンだのと、二重の損を仕てるよ、惜しい哉、折角あれだけの人間が結束して立ッたンだから同じ遣るなら何故、勞働者として自個の利益を擁護せンがため賴むべき最後の文明的手段こゝにありと叫ンで堂々たるストライキを白熱的に有效ならしむる方法を取らなかッたかなァ、僕等が川口電工に對して遣ッたのとは違ひ、あれだけの人數で、あの大きい相手を向ふに廻しての勝負に、さう二度も三度も遣り直せるもンでない、つまり晴れの土俵で見物滿員の一番勝負だ、その大切な相撲に割の惡い最眞目の尠い損な立合をして仕舞ッたよ、どう考へても惜しくッて堪らない、もし僕が、この岡田貞吉が、あの仲間に居りやァ」

おもはず右の腕節を捲りあげて、左の手に握りながら、冷かなる一種異樣の微笑を浮べ、

「たとひ討死するに仕ろ、まさか犬死にならないだけの事を後へ殘して、たしかに面白い戰鬪をして見せるがなァ」

自己の額際に薄く殘れるビール瓶の疵痕を、そッと撫でながら、

「なァ、おい、あの仲間に交ッて、これだけの疵でも受けたさすりやァ、きッと受けたがけの藝を演ッて見せるが、生憎く相手が君だッたし、おまけに今ァ土鍋飯の世話になッてるから、つまらないよ、はゝゝゝいくら腕が鳴ッても考へがあッても、やはり人間の働きは時と場所と相手に依るね」

ばた〳〵と急に團扇の音を立てゝ焜爐の下を煽ぎ出せし田口彌太郎、

「流石の軍師も、たぬき野郎を相手に仕て居ちやァ始らないね、お氣の毒さまだよ、はゝはゝ」

貞吉は首を伸ばして土鍋飯の上を見ながら、

「おい、もう吹いて來たな」

田口は土鍋の蓋を片手の指頭に押へて、

「もう炊けてな、炊けてるが飯といふ奴、この一息で美味くなるンだからね、こゝで蓋を開けるこ出來損ッて、いけない」

「や、そこだ、その呼吸だ、勞働問題も實は齒痒くて堪らないから、あゝはいふもンの、大分に世の中の調子が變ッて來たぜ」

「どう變ッて來たね」

「つまり今その土鍋で炊いてる飯と同じこッた、よほど我々の目的に近づいて來てるよ、もしその焜爐を社會こすれば、その火が我々勞働者で、鍋の中に這入つてる米が資本家



だ、ね、始め君、まッ黑な炭を焜爐に詰め込ンだ時、土鍋の中の米の奴め、馬鹿に仕やアがッて、野郎ども何をするかといふ調子で高を括ッてるこ段々その炭が赤くなるに從ひ尻の方が變な氣持になッて來て、おやと思ッた時は、今まで冷たかッた水が湯になッて、ぶつ〳〵沸て來るし、一時に押寄せ來る内憂外患、もう無效だ、もう飯に炊きあげられる最後で、しゆッ〳〵と白い湯氣を吹き出すのは、いよ〳〵降參いたしましたこ彼等の白旗を掲げた證據だよ、現に今その通り白旗を掲げてるだらう」

岡田の談話に夢中の田口、いはれて土鍋を振返るや否、

「や、仕舞ッた」

「どうした」

「うッかり仕てる間に折角の白旗が無くなッて、ぷンと臭いよ」

「焦けたね」
「正に焦けた、資本家の立積になッた奴、滿足な飯にもなりやァがらない、はゝゝゝ」
「なァに少しは焦けるくらゐ、炊き詰めて遣ッた方が宜い、炊き損ッて粥になるより增だよ、はゝゝゝ」
急いで晝飯を終りし岡田貞吉、まだ茶碗と箸を手にせる田口に對うて、
「毎日の事で、すまないが喰ひッ放しの後を賴むぜ、出るからね」
「女房役は約束だから、いち〳〵さう斷るに及ばないが、どこへ行くンだ、これも女房氣取で、ちよいと聞くンだよ、はゝゝ、」
「うまい、はゝゝ冗談は置いてね　兎も角まァ六人とも皆、それ〴〵穴を目ッけて藻潛り込ンだが其後、どういふ工合か樣子を見がてらに逢ッて來ようと思ッてる、千住の工場に二人、深川と本所と佃島と大井に一人づゝ別れてるから一日に一箇所づつとして北より南に廻はる心算だ、今日は千住の方へ出かける」
「なるほど、異體同心と誓ッた八人の中で我々こゝに茫然、遊ンでると思はれても困る、ぢやァ今日千住の二人だね、よろしく言ッてくれ、一順ざッと君が廻ッた後で、また僕が出直さう」
「どうせ晝間、逢へない相手だから今日は電車の厄介にならず、ぶら〳〵半日がゝりで行かうかと思ッてる」
「しかし芝の新網から千住までは隨分、あるぜ、殆ンど東京の市中を南北へ突貫くンだ」
「なァに幾何あるもンか、第一また運動になるよ、今まで毎日、あゝ働いて來た身體に樂な癖を付けちやァ却ッて、いけない、のみならず乃公はね、ぢッと腕を組ンだり横にな

ッたり靜な時よりも寧ろ、ぶら〳〵歩いてる時か仕事でも遣ッてる時に面白い考慮が出るンだ、よく言へば壺のやうな奴で、身體は動かして頭腦の中から何か振り出す工合に出來てるが、わるく言へば元來が座敷の人間に出來て居ないよ、どうしても勞働問題は乃公の性分に合ッてる藝だ、もし誇ッて自慢すりやァ時代の使命を受けて來たンだ、はゝゝゝ」

「こころで、この僕は何の使命を受けるだらう、いつまで此まァ十鍋飯の炊事掛ぢやァ少々、心細いよ」

「はゝゝゝさう心細がるな、君は君で先天的に立派な使命を帶びてるよ、早い談話が、いくら上等の新らしい刺身でも葵が無くッちァ食へまい、天麩羅に大根おろしがあッて蕎麥の藥味のあるのと同じ理由で、自然と無用の用になッてるさ」

「葵と大根おろしと蕎麥の藥味か、はゝゝゝどうしても一本立の本役になれず、年中お傍で影の方に遠慮してるンだね」

まァ其邊で堪忍しろ、影の藝は寧ろ表面の活動よりも大切な場合があるよ、ぢやァ出かけるぜ、久しぶりだ、急用でもないから上野の山をぬけて、ぶら〳〵千住まで歩かう、今夜ァ遲くなるかも知れないよ、心配せず、嬶ァ待ッてろ、はゝゝゝ」

もし市場の競賣となれば　忽ち八方より爭うて奪ひ合ふべき寶石を、そッと人知れぬところに秘〻置き、いまだ細工に手も付けぬ其まゝを猶更の樂みとして、をり〳〵これを見に來る心地の省三、

お雪また世に輝いて人の目を射るダイヤモンドよりも、靜に穩かに底深き光りを包めら眞

珠の如し、

「ねェお父さン、あゝ喧しく仰しやるンですから、やはり御飯を炊たり何かする爨やさンを一人、來て貰ひませうね、その邊の慶庵へ頼ンで」

「父子たッた二人で別に用もなし、贅澤なこッたが、入らした時に困るから、ぢやァ、さうするかね」

「もし、いふ事を聞かないと、これから何も持ッて來てやらないと、ほゝゝゝ」

「お若いに似合はず全く、行届いた潔好な方だよ、來る毎に、きッと何か、いろンな物を下すッてねェ」

「ですから、わたし、いつも御辭退するンですが、いや、これが乃公に取ッて一事の樂みだと仰しやるの、今度は何を持ッて行かうか、どンな物を買ッて行かうかと、わざ〳〵人の知らない餘計な心配して考へるのが實に面白くッて堪らない、しかし三度に一度ぐらゐ、ごうせ氣に入らない物があるだらうから、そンな時は遠慮なく不足を言ッてくれ、さうすると此方に張合があッて猶更ら愉快だと、つまらない事を愉快がッて居らッしやるンですよ、ほゝゝゝ」

「笑ひごッちやァない、勿體ない、有難い思召だ」

「その代りね、お父さン、をり〳〵憎らしい事もなさるンですよ、わたしを馬鹿にして、獨りで喜ンで居なさいますの、過日、ポケットから大切に出して下さるのを何だと思ッて、包ンだ紙を開いて見ると、ほゝゝゝぶッきり飴たッた二個、ほゝゝゝおまけに眼前で是非これを食へと、わたしの口へ無理に、まア困りましたワ、その時こそ、わたし、ほンとうに腹が立ッて、さンざ不足を言ッてあげましたの」

「はゝゝゝなか〳〵御冗談もなさるンだね」

「その謝罪料だと仰しやッて、きのふ入らした時は、あの兩眼鏡ですの、あれは、わたし嬉しくッて、今朝も二階から見ると、上野の森の葉まで、はッきり自分の庭にあるやうですよ」

「ありやア大變お高いンだからね、小ぢンまりした象牙細工で、同じ兩眼鏡でも、よほど一等に違ひない」

「女持の中でも一番、小さいンださうです、あれなら、ごッかへ行く時だッて、ちよいと帶の間へ這入りますからね」

また俄に思ひ出して、物めづらしげに二階へ上り行き、緣端の手摺に兩の肱を掛けながら、その兩眼鏡に見渡せば、上野の森は手に取る如く、我家に續きし五六軒の庭の木も互ひの葉越に重なり合ふて、枝と枝との繁りし僅の隙間より鶯坂の人、ちら〳〵こ見ゆる中に、悠々こ降り來る兄の貞吉、

ちらと兩眼鏡に入るや否、お雪は慌てゝ二階を駈け降りしが、わざこ靜に襖越、

「お父さン、ちよいこ其處まで出て來ますよ、すぐ歸りますから」

「買物かね」

「いゝえ、あのウ今、お二階から見るこ何處かの廣告屋さンでせうね、ぞろ〳〵大勢で妙な風をして此横町を通るらしいンですから」

「何だい、小兒のやうに、それを見に出るのかい、はゝゝゝ」

父の笑ひ聲を後に殘して小走りに二曲り、櫻木町の通りに出でゝ見れば、その角を左に四五軒も行過ぎし兄の後姿、また駈け出して、

「兄さン」

振返りし兄の貞吉、おもはぬ不意に驚いて、

「や、お雪か」

息切の胸に片手を當てながら、遁げもせぬ兄の袂を片手に握りて、

「兄さン、此方へ來て下さい兄さン」

「どこへ行くンだ」

「どこでも宜いンですよ」

其まゝ後へ引戻し、狹き横町の淋しき樹蔭に立ちながら、始めて兄の姿を下より見上げし妹の目には、いつしか睫毛の露、

「兄さン、額の疵の痕、まだ、うッすり殘ッて居ますねエ」





五分刈の頭より撫で下せし兄は苦笑ひ、

「なァに、もう其うち、消えッちまッて無くなるよ」

「今、どこですの、どうして居なさンです」

「乃公の事よりも阿父さン、變りは、ないかね、たのむぜ」

「お父さンは、此方へ來てから、氣の故か段々と宜いやうですが、やはりね、をり〳〵兄さンの事を」

「すまない、すまないが心配してくれるな」

「心配するなッて兄さン、さッぱり音信も仕て下さらないで、もう半月の餘にもなるぢやありませンか」

「いろ〳〵の事情もあり、また考へた事もあッてね、つまり双方のため、わざと音信も仕

ないンだよ、こゝ一月も立てば、自然と分るやうになッてるンだから暫くの間、阿父の機嫌を取ッて居てくれ、しかし小田原町を引ッ越した事だけは、ちやンと乃公の方で知ッてる、どこへ往ッたに仕ろ、あの境涯を脱けたといふ一事で、實はね、影ながら安心してるンだよ」

常著のまゝなれど今までとは違ひし妹の姿を、じろ〳〵と見ながら、

「この邊だな」

「つい、其處なンですよ」

「さうか、乃公は今日、ちよいと千住まで用達に行くンだが、時間の都合で、ぶら〳〵上野の山をぬけて來たンだ、よく目ッけたな」

「鷹坂から兄さンの降りて來るのを、ちらと二階で、見たンですの、慌てゝ飛び出して」



「ぢやァ線路に近いね、二階のある家だね、かうして逢へば、妙なもンで、どンな住居か、門口からでも、ちよいと見て行きたいやうな氣がするよ」

お雪は返辭もせず、其まゝ兄の袂を捉へて無言に連れ行く哀れさ、連れ行かれながら、

「例の人、をり〳〵來るかね」

それには返事もせず、やはり無言のまゝ兄を伴うて、竹の垣根に添へる小さき門の前、

「兄さン、こゝですよ」

兄の貞吉、まづ岡田久藏といふ父の表札に目を付け、茂れる椎の木の葉越に、二階の横窓を見上げながら、

「はゝァ、こゝか、なるほど、小ぢンまりとした靜な好い家だ、岡田雪と仕なかッたところは考へてる、阿父の表札おの人の字だらう」

「こゝへね兄さん、移ッて來た、その前の日に、もう、ちやンと、この表札が打ッてあッたンですよ」

「さうか、その樣子ぢやァ外の事も、よく届いてゐだらう、庭もあるね」

「庭は、さう廣くもありませンが、お二階の向ふ側は手摺になッて居て、大變に見晴しが宜いンですの、上野の森は、すぐ眼前でね、お父さンは階下で、緣端の付いた奥の八疊で、かけるものも敷蒲團も皆、さッぱりとした新しいので、樂に寢て居ますよ、そして三日置に中根岸から兄さン、立派な名高い、お醫者樣に來て戴いて、お父さン全く喜ンで居ますワ、自然に氣分も段々、よくなッたと見えて朝と夕方は、きッと二階へ上ッてね、あゝ宜い景色だ、勿體ない、これで乃公は死ンでも十分だと」

お雪、そッと片袖に目を拭へば、兄は猶更ら兩眼を瞬きながら、

「現在の兄に生れた奴が、この通り我まゝの不孝者で、お前に一人の親を孝行して貰ッちやァ濟まないが、暫くの間、たのむ、第一あの人に禮をいふべき筈だが、乃公の口で改まッても變だからね、お前、そこを巧く飲み込で、おろそかの無いやうに仕てくれ、ありやお前のため生涯の力ともなるし、また當世流の金持根性としては實に珍らしく、面白く一風、變ッて出來た人間だ」

さらに聲を低めて、

「だがね、お雪、世の中は金の力や智慧ばかりでも仕樣のない事が隨分、あるからね、あの人だッて自分の思ッた通りにならず、あべこべに裏切られて難儀したり煩悶したりする場合があるかも知れない、そンな時は、しッかり仕ろ、たとひ火の中でも水の底でも潛りぬけて行くこころまで行く此、この兄の妹だ、するだけの苦勞は凹垂れずに仕て見

る覺悟で居ないと無效だぜ、こりやア冗談半分だが、もし阿父がなくなッて、もし外に生きる道がないとして、あの男なら情死でも承知の上で遣る乃公だ」

そッと手を握りながら、

「しかし阿父まだ居るぜ、賴むぜ、なるべく情死なンか仕てくれるなよ、はゝゝゝ」

今日は必ず行くといふ約束も考へもなけれど、隙さへあれば何とやら家にも落着かず會社にも落着かず、自然に引寄せらるゝが如く體を擦りぬけて、ふら〳〵と上野の山に向ふ戀の省三、

されど運轉手に金轡を銜めて自動車を飛す世間普通の苦策を學ばず、ぎうしたか近來は頭が惡いと稱して、をり〳〵人の前に振ッて見せ、これは運動に限ると稱して、時間も定め ず行先もいはず、ぶらりと立出で、出るや否、タクシーを傭うて上野のステーションに駈け付け、其まゝ山を越えて鶯坂を降りるか、電車に乘りて坂本通りを横に入るか、いづれにせよ、わづかの間を殆ど夢中の急ぎ足、

今日は山越に櫻木町より左に折れて、ふと見れば、門の前に差俯けるお雪と立てる男の後姿、

流石の省三、おもはず身を片側の軒下に寄せて、平生と違ひし眼の光り、じッと見直せば、その男の横を向ける顏は兄の貞吉、

ふゝと鼻頭に我みづから我を嘲る如くに笑うて、化物の正體見たり枯尾花、あの兄が門を這入るか這入らぬかと、これも時に取ッて一種の興味ある見物、

かくとも知らず妹は兄の袂を捕へて放さず、

「兎も角も兄さン、ちよいと這入ッて下さいよ、折角こゝまで來て」

兄は頻りに片手を振りながら、

「これで澤山だ、お前に逢ッて、この家を見て、こゝだと聞けば、もう安心だよ」

「兄さンばかり安心したッて、お父さンは絶えず、やはり兄さンの事を氣に仕てるンですから、長くなくても、ちよいとね、少しは兄さン、嘘を交ぜても、お父さンに安心させて下さいよ」

「だが、先刻もいふ通り、こゝ一月で何ミか方角の定まる事があるから、その上に仕てくれ、さうすれば、わざ〳〵苦しい嘘を吐かなくとも、どうか斯うか目鼻の付いた談話で、阿父に安心させるよ」

「いやです、わたし兄さン、いやです、放しませンよ、お父さン、もし怒ッたら、わたし謝りますよ、實は兄さン、こゝへ來てからね、あまり今までのやうに兄さンの事を喧ましく、口へ出さないのは、あの方の手前もあるンでせうが、このわたしにまで遠慮してるンぢやアなからうかミ、それが兄さン、どンなに氣の毒か、考へて見て下さいよ」

「怒られても、ぶたれても乃公は構はないがね、怒らしたくないよ、ぶたしたくないから暫くの間、堪忍してくれ」

「わたしの堪忍よりも、お父さンを心の中で、堪忍さすのは、あンまりでせう、どうあッても、わたし放しませンから、もし放すなら兄さン、わたしを突き飛ばして遁げて下さい」

兄の貞吉、いかにも苦しげの滿面を皺めて、

「お前も、かうなるミ、わからないなア、も少し、わかッてくれよ」

「わたし、かうなッたら、わかりませンよ」

「困るなア」

「此方が困るンですよウ兄さン」

やう〳〵兄を門の内に引入れて、其まゝ庭に立たせながら、父の臥したる奥の襖を、そッと開けしお雪、

「お父さン、遲くなりまして」

「小言をいふンぢやアないが、いつまで小兒のやうに廣告屋の行列なンか見に出ては困るよ、そンな時お前、もしあの方が入らしたら、どうする、はゝゝゝ」

今更ら嘘ともいへず、

「いゝえね、すぐ歸らうと思ッて居たンですよ」

「思ッて居ずに、すぐに歸るが宜い」

「それが、ちよいと歸れなくなッたンですから」

「どうして、何故だよ」

「逢ッたンですの」

「誰にさ」

「兄さンに」

父は思はず寢ながらの首を擡げて、

「兄の奴、來たのか」

「櫻木町の角まで出ますとね、兄さンが、その邊を、うろ〳〵仕てるンですよ、さンざ探し歩いたンださうですよ、わたしの顏を見て、外の事は何もいはず、第一に、お父さンの病氣は、どうだ、おい〳〵と宜くなッたか、食物は進ンで來たかと、ね、お父さン」

「それほど氣になッて居て、自分の居處も知らさず、今まで面も出さないことは、どういふこッた、あの方の御恩を好い事に仕やアがッて、お前にばかり苦勞さしてる奴だ」

お雪は父の言葉を打消すが如くに片手を振りながら、低き聲に力を込めて、

「お父さン、さう一酷に、それでは兄さン、あンまり可哀さうですよ、今まで來なかッたのは、いろ〳〵自分にも來られない理由があッたり、またね、あの方にも、遠慮して、わざと控へて居たンでせうが、やはり堪らないで今日、うろ〳〵探しに來たンですから」

「それにしても彼奴、どうして、こゝといふ事が分ッたらう」

「お父さン、實はね、外の事は知りませンが、わたし等の事だけは何時でも電話で、あの方へ、お聞き申すやうになッてるらしいンですよ、どこにでも自動電話がありますからね、お父さン、こゝを、よく考へて御覽なさい、お父さンは一途に兄さンを惡いものゝやうに思ッて居なさいますが、あの方は初めから、兄さンを譽めて居らッしやるンですよ、また兄さンも段々、自分の心に分ッた事があると見えて、こゝへ移ッて來る前なンかは、まるで人が變ッたやうに、あの方を譽めて居たぢやアありませンか、どうしても、わたし、その間に何か、いふにいはれない、約束でもありは、しまいかと思ひますワ、さうでなくッて、あの兄さンが此、わたしを、かうして置くもンですか、百圓のお金を叩き付けし返したり、例の切手を戴いた時なンか、お父さンに向ッても、泣いて怒ッたほどの兄さンぢやありませンか」

父は今更の小首を傾けて、痩せたる腕を組みながら、

「なるほど、さういへば、そンな工合も、あるかなア」

「ですからさ、お父さン、さう一途に叱るのは、可哀さうですよ、わたし兄さンに代ッて

惡い事は謝りますからねェ」

「だが兄の奴、もう歸ッたのかい」

「いゝえ、わたし、連れて來て、入口に立ッて居りますよ」

父の目にも涙　妹の目にも涙　兄は猶更ら入口に耳を澄まして兩眼を閉ぢながら男泣きの涙、

妹に呼び込まれし貞吉、始めて訪ひし他人の家よりは猶更の遠慮勝に身を縮め、兩手を膝に頭を垂れながら、額越に父の顏色を窺ひ、

「相すみません、も少し早く、來なければならないンですが、いつも同じやうぢやァ猶更ら濟まないと思ひまして、つい、一日延ばしに」

お雪は傍に氣を揉みながらの助太刀、

「あンまり兄さンは、思ひ過ぎて、却ッて、いけないンですワ、すむも、すまないもありますかね、父子同胞ですもの、ねエ、お父さン」

父は寢床の上に坐して、妹には首肯きながら、兄には痩せたる腕を組直し、

「萬事、かう潔好に仕て戴くし、お雪はお雪で相變らず孝行してくれるし、これで十分だ、有難く思ッてる、決して乃公に不足はないがね、貞吉、それを貴樣、好い事にして居ちやァ困るよ、それで安心して居ちやァ濟むまい、いくら妹だッて少しは氣の毒だと、お雪お前は默ッて居なよ、こゝで口を出すと談話が出來ないから默ッて居てくれ、全くだぜ貞吉、兄なら兄のやうに少しは考へろ、全體、今ァ何處に居るンだ、何を仕てるンだい」

「へい、それも實は早く打明けて、お話しする筈でしたが、御承知の通り、あゝいふ譯で

會社を出ましたのが八人ですから、兎も角その八人が何とか身體の仕末を付けなければなりませン、ところで、めい〳〵の都合もあッたり、また行先に、いろ〳〵の事情もあッたり、加之も、この貞吉が例の事で發頭人と見られて居ますからね、どうしても身の納りは一番、後になるのが當然で、それがため七人の成行を見て居たンですが、おひおひと方付きまして、現在に殘ッてるのは、もう自分と外に一人だけです、其奴と一緒に土鍋飯を炊いて、芝の新網に二階借りして居ります」

お雪また傍より父と兄との顏を見分けながら、

「もし兄さン一人なら當分、こゝへ來て居ても、宜いンですがねエ、その方が家の用心もよし、わたしも力になるし」

父は俄かに目を剝いて片手を振りながら、

「ミンでもない、小田原町の裏長屋で元の家なら兎も角、かうして戴いてる這家へ、この兄の奴が、のこ〳〵來て居られるかね」

「だッて、お父さン、他人ぢやアなし」

「他人でないから猶更ら、いけないンだよ」

「わたし、さうでないと思ッて居ますワ」

「何故、どうして」

「何故ッて、そンな事を彼是、仰しやる方でないンですから」

「わからないね、お前も考へて見ろよ、そンな事を彼是、仰しやらない方だから、さうは出來ないンだ、第一この乃公が付いて居て、づう〳〵しく、そンな事が出來るかい」

「ではね、お父さん、わたし一應、伺ッて見ますワ」

「いや、乃公が伺はせない」

「お父さンに相談した事ミ、しなければ宜いでせう」

「相談しない事と、いへるかね」

「わたし、いひますワ」

「ちよッ、勝手にするが宜い」

「これだけは、お父さン、勝手に、いはして下さい」

兄の貞吉、差俯いて、ほろ〳〵ト兩眼より涙を流しながら、

「お雪、だゞ默ッてろ、お父さン、また近々に來ますからね、お身體を大切に、願ひます」

父と妹のために泣かされて、あるにもあられず、遁け出す如くに座を起ち、麻裏の古草履を引摺りながら門を出でむとすれば、出會頭に入來る川口省三、

「やア君、もう歸るのか、まア宜い、まア宜いぢやないか、逆戻り逆戻り、幸ひだ、迷惑でも逆戻り仕て貰はう」

實は父子同胞に打解け談話の時間を與へ、わざと思はぬ不意に出逢ひし如く、片手を胸に輕く押戻しながら、

「暫く逢はない間に少し、話したい事が出來たから君、是非」

主義のためには敵、情のためには恩人、いかにも苦しげの貞吉、慇懃に頭を下げて、

「今日、こゝへ初めて、まゐりましたが、いろ〳〵潔好に、有難う御坐います」

「そンな事を君、あらためて何だね、はゝゝゝまア兎も角、二階で話さう」

「ですが、ちよいと外に、約束が御坐いまして」

「外に約束があれば、手間は取らせないよ、しかし何處へ」

「千住まで、行かなければなりませンので」

「千住、ぢやァ其處まで、歩きながら話しても宜い」

兄追うて入口まで立出でしお雪、其まゝ伴うて去らむとするを見るや否、慌てゝ飛び出しながら、

「兄さン、折角、かう仰しやるンですに、どンな用か知りませンが千住へなンか、いつでも行けるぢやありませンか」

此方を振返りて、省三へは曾釋の小腰を屈め、

「すぐ、連れて上りますからお先へ」

その後姿の内に入りしを見送りて、また兄の袂を捉へ、

「兄さンは何故、さうですよウ、こンな都合の宜い事がありますかね、かういふ時に兄さン、あの方と二階で、暫く談話でも仕て下さる第一、お父さンに對して、わたしの言ツた事も立つし、また兄さンからも、なるほゞ安心させる譯になるぢやァありませンか」

兄は頻りに首肯いて、

「そりやァ、さうだがね、流石の乃公も、あの人に向ッては、いふにいはれない、苦しい立場になッてるンだよ」

「どンな苦しい立場があッても、こゝは兄さン、堪忍して下さい、お父さンに安心さして下さいよ、後生ですから」

「さう、いはれると、なほ苦しくなッて堪らない」

「わたし、兄さン、聲を出して、泣きますよ」

「よし、よしよし、逢ッて話さう、阿父には何もいはず、すぐ二階へ上ッて宜いな」

「すぐ上ッて下さい」

「たのむぜ、阿父の前を萬事、たのむぜ」

「呑み込ンで居ますよ」

貞吉、滿面を皺めながら、二階の梯子段を上り行く足音、それを聞いて父の前に出でしお雪、

「お父さン、入らしたのよ」

「さうらしいが、生憎く兄の奴め」

お雪おもはず兩手を合しながら、

「お父さン、默ッて居て下さいよ、今に、今に、わかる事がありますからね、わたしに任して置いて下さいよ」

慈人こ兄は二階、襖越の八疊には父、お雪は我身たゞ一個の心を上と下こに配りて、新らしき煎茶道具を取出しながら、鐵瓶の湯の沸く間も親を慰め顏に聲を低め、

「ねエお父さン、よくまア昨日、買ッて置きました事ね、それに今朝お湯の熱いので、すッかり洗ひましたから、すぐ用に立ちますし、お茶も今までと違ッて、どうか斯うか、お氣に入るでせうよ」

父は寢ながら片手を伸ばして、襖を細目に引開け、

「お茶は、お氣に入ッても兄の奴が心配だ、うか〳〵また例の氣性で、妙な工合から變な理窟を揑出しやア仕まいかね、兎も角お雪、あンまり饒舌らさないに限る、長居さして

「お父さン大丈夫ですよ、いくら兄さンだッて折角、かうして戴いてる事を現在に見て居ながら、わざ〳〵私等の不爲になるやうな事を言ッたり、また毀したりする筈がないぢやありませンかね」

「わざ〳〵毀しもすまいが、談話に實が入ッて調子に乗り出すと直ぐ彼奴、氣が荒くなッて困るよ、あれが小さい時からの病だ」

「それもね、お父さン近頃は段々、いろンな事で苦勞する故か、よほど變ッて來て居ますよ」

「まア何にしても、お前、傍を離れないで、早く歸すやうに仕てくれ、そら、あの通りだね、相手かまはず、あゝ無遠慮に大きな聲で、あゝいふ笑ひ方をする奴だ」

「ほゝゝあれは兄さンの地聲ぢやありませンか、お父さンのやうに、さう、いち〳〵、喧ましく」

「だッて、時と場合も考へずに謹みのない奴だ」

「怒ッてるのと違ひますよ、笑ッてるンですもの、お父さンは餘計な心配ばかり仕過ぎてさ」

「よけいな心配を仕過ぎて恰度、いゝ加減になる奴だ、お前と搗交ぜて產めば宜かッたに、わるく片寄りやアがッたよ」

「まア、お父さン、ほゝゝゝさう自由になれば何故、わたしも男に產ンで下さらなかッたの、ほゝゝゝ」

二階には川口省三、柱に背を持たせながら貞吉に對ひ、絕えぬ莨の煙と共に言葉を續けて、

「笑ひ談話は兎角、實際、此ごろは追々と君の主義が諸方へ現はれて來るやうだ、こり

やア迚も防ぎ切れない自然の大勢が押寄せて來たンだらう」
貞吉、兩腕を組ンで聊か決心の微笑を浮べながら、
「いや、押寄せるの防ぎ切れないのといふ、其處までは行きますまいが、そろ〳〵双方より近づいて來たか位には思ッて居ります、はゝゝゝだが今日まだ勝敗は分りませンよ、それに付て岡田貞吉、ちよいと近來、考へ直した點がありますから、御參考にならないまでも、お話し仕て見ませうかね」
「聞かう、是非、聞きたい」
右に鐵瓶を提げ左に茶器を持ちて靜に上り來りしお雪、兄に向うて聊か自慢らしき言葉も、實は省三へ禮をいはせたき謎、
「どうです兄さン、此お二階は全く、好い景色でせう、朝と夕方は猶更ら閑靜で、上野の森が畫に描いたやうですよ、それで居て、ちよいと外へ出れば、すぐ何でも便利ですの」
兄は横を向いて首肯きながら、
「お前も阿父も幸福だ、かうして居りやア蒼蠅い世の中を離れたと同じ譯で、自然に氣も暢々するだらう、まア潔好なこッた」
省三は笑ひながら、
「なアに只、ほンの間に合せで、一時の腰掛だよ、はゝゝゝさしあたり仕方がないから當分こゝで堪忍すれば、其うち今に、どうかなるだらう」
お雪まづ省三に茶を進め、兄の前にも差出して、
「兄さン、御用があッたら呼ンで下さいよ」

これを幸ひに双方より打解けて戀人し兄との間を和げたく、わざと其まゝ階下へ降り行く後姿を、今日に限りて目も遣らぬ雀三、眞正面の貞吉に對ひながら、

「ところで君、今の談話だが、こンなに喧しくなッて來た勞働問題を、あれほど熱心な君として、こういふ工合に考へ直したね、まさか主義を變へた譯ぢやアあるまい」

貞吉、組みし兩腕を解いて膝の上に置き、いかにも緊張せる顏面、

「主義は變へませン、しかし近來、頻りと諸方へ現はれて來る勞働問題に付いて、其方法こ手段、即ち騷ぎ工合に甚だ面白くないこいふ感じが起ッて來ました、かういふ鹽梅では結局、寧ろ勞働者それ自身の前途に於る不利益を釀して老獪なる資本家のため、却ッて、うまく遣られは仕まいかこいふ恐れを抱いて來ました、つまり今日の勞働騷ぎは段々こ眞面目を缺いて來たのみならず、頗る浮ッ調子の流行性を帶びて來て、たゞ騷ぐのが愉快だこ考へてる奴、騷がなければ損だと思ッてる奴、かういふ連中が眼前の小い利益に附和雷同して、中には聊か興行的に芝居めいた藝を演ずる奴もあるらしい樣子ですから、もし大膽にして思慮ある敵の目より見れば、寧ろ與し易い奴等と思はれてるかも知れない、どの位の深味があッて、どの位の力があッて、どの位の勢ひを以て、どの位の苦しいところまで攻められるかと恐れた勞働問題も、この位の程度で脫線するやうな相手ぢやア、もはや大丈夫、さう慌てるにも及ばないこ高を括られたかも知れない、こ此、岡田貞吉、貴君の前でいふのも變ですが、實は味方のため殘念で堪りませン、も少し前途を考へて、度胸の太い根性骨の强い慾の深い奴が一致してくれるこ、折角の機運に向ッた勞働問題を、かう粗末に輕々しく扱はないンですが！

我を忘れて平生の氣性に熱を帶び來りし貞吉、そよ〳〵と上野の森より吹來る葉越の風に首筋を撫でられ、また階下には病める父と衰れなる妹ありと思ふや否、俄に冷めて淋しき微笑を浮べながら、

「や、こゝでは一切、かういふ談話は止しませう、つい、うッかりと饒舌りかけた、はゝはゝ」

省三は柱に持たせし背を離して、聊か前に膝を乘り出し微笑を浮べながら、

「外に誰も居らないし、さう君、急に止めなくッても宜いぢやないか、折角、そこまで話しかけて」

貞吉も思はず笑ひながら首を縮めて、

「はゝゝゝどうも惡い癖があッて困りますよ、なるべく氣は付けて居るンですが、つい、饒舌り出すと時も場處も構はず、あゝなりましてね、つまり岡田貞吉の短所こゝにあるンですな、處世上、よほど損な奴に出來て居ますよ、はゝゝゝ」

「いや、それが君の最も愉快に出來た面白いところで、寧ろ怜悧な處世術なンか顧みざる、その熱烈な點があッて始めて君といふものが一貫した主義の上に現はれるンだよ」

「ところが、をり〳〵調子外れに出來損ッたまゝで現はれたり、よけいな事で人の感情を害する上に現はれたりするから、いけませンよ、はゝゝゝ兎も角も今日こゝで勞働問題に付いての一切、議論かいた事は止めませう、考へて見ろと全然この貞吉は貴君に對する總てを間違ッて居ました」

「なぜ、どうして」

「つまり貴君の前では岡田貞吉、恩人と相撲を取るやうな心持がして、いかにも自分の立

場の苦しい人間です、捨てゝ置かれても仕方のない、あゝいふ場合にも直ぐ病院へ入れて戴いたし、その後また會社を出る時は一文なしの追ッ拂ひになるべき筈を八人とも、あゝいふ工合に人の知らない深い同情を寄せて戴いたし、お目にかゝらなければ兎も角、その貴君の前で、いくら主義にしろ勝手な自分の議論を持出すなンて、どう考へても間違ッて居ました」

「馬鹿々々しい、そンな過去ッた事を今更ら君、はゝゝゝ」

「ぢやァ過去ッた事を止して、現在の事をいへば現在、この貞吉の坐ッてる、この二階の下には、どンな事しても養はなければならない阿父と妹が、この通り萬事お世語になッて居るンですからなァ、その貴君に對して、うかゝ自己の議論も絲瓜もあるもンですか、はゝゝゝとンでもない大間違ひ、實は一言もない奴だ」

「どうしたンだよ君、急に妙な事を言出すぢやないか」

「いや、決して、どうも致しませンが今、この階下で、阿父の咳をする聲が耳に這入りました時、ふと自分の間違ッてる事、社會へ出ては間違はなくてもこゝでは間違ッてるといふ事に氣が付きました」

兩腕を組ンで差俯きながら、

「介な阿父と、不束な妹、どうか此上とも宜しく願ひます」

止めても止まらず、急に我身を何物にか運び出さるゝが如く、其まゝ立去る貞吉を、二階の降口より首を差出して見送る省三、

「ぢやァ失敬するよ」

梯子段の途中より振仰ぎし貞吉、

「恐れ入ります」

お雪は兄の降り來るを待受けて、聲を潜め、

「お談話、もう濟みましたの」

「今日はね、これまでにない打解けて、互に心持よく、いろゝな談話、仕たよ」

「まア嬉しい事、わたし、それで肩の荷が下りたやうですワ、兎も角も兄さン、お父さンへ安心さして下さいな」

「いや、乃公は只、ちよいと言葉をかけて歸らう、乃公の十言よりも、お前と二階の人から一言、話して貰へば十分だ、その方が却ッて安心するよ」

奥の八疊に臥したる父へ、わざと襖越の貞吉、

「千住へ行く約束の時間が後れましたから、逢はずに出ますが、後で萬事、聞いて下さい」

父も襖を開けず其まゝの聲、

「よく、お禮を申したらうな」

「へい、よく、申しました」

「貞吉、いつも同じ事をいふが、なるべく世間へ憎まれないやう、控へ目に、おとなしく仕ろよ」

「御心配ばかり、かけまして、すみませン、また其うちに來ますから、今日は此まゝで」

妹を手招きして、門の外へ立出で、椎の木の葉越に二階の横窓を振り返りながら、

「こンな事を今更ら、いはなくッても分ッてるだらうが、お雪、あの人は粗末に出ちやア、いけないぜ、お前は生涯、外に智慧も考へる事も入らない、只あの人に自分の運命を任してさへ置けば、それで宜いンだ、それが何よりも第一の恰悧な譯になるンだからね、

もし萬一、どういふ事で、ゴンな目に逢ッて、ドンな苦勞するにしても、自分の運は、かうだと思ッて脇目も振らないやうに仕ろ、うッかり氣を外しちやァ無效だそ、幸ひ事に此まゝ通れば、たゞひ日蔭にせよ、晴れて世間に出られないにせよ、輕薄な世の中で今日あゝいふ人に出逢ッたのは、實際お前の幸福だ、金さへありやァ弱い女を商品のやうに心得てる奴の多い近來、ちよいと探して、あれだけの人間は尠いよ」

「大變、今日は兄さン、好い、お談話があッたと見えますね」

「いや、好い談話よりは寧ろ、實は、好くない談話の方が多かッたよ」

「え、よくない談話、どンな談話ですの」

「口だけで、たゞ當座の眼前の好い談話はね、誰もするよ、こころを、うちあけて、つまり思ひ通りにならない時の事を、この兄に打明けて隱さず、聞たから猶更ら乃公は、お前のために喜ンでるンだ、牡丹餅で頰ッ邊を叩くやうな、うまい事づくめに話されるよりは、萬一、かうなッた時、かうすると腹の底を割ッての談話だ」

「兄さン、その萬一といふのは全體、どンな事ですの」

「心配するな、萬一だから、まァ無い事だよ、考へて見ろ、お前と乃公と二人、かうして居る頭の上へ、この椎の木が不意に倒れて來ないとも限らないが大丈夫、めッたにないこッた、はゝゝゝ今日は幸ひこれで親父の機嫌も少しは直るだらうから、近々また來よう」

其まゝ三四間も行過ぎし兄の後姿を、じッと見送りしお雪、俄に駈け出して追ひ縋り、

「もし兄さン、萬一あの椎の木の倒れるやうな事があッたら、どう仕ませうね」

兄の貞吉、大浪の如くに首肯きながら、

「その時はね、あの人の身體へ、しッかり嚙り付いて居ろ、離れるな、自分だけ助からう

なンて卑怯な根性を出すなよ、世間の淫奔娘や、お茶ッぴいでない、乃公の妹だ」

資本家として勞働者に對する意見の相違は、まだ議論の餘地もあり將來の時日もあれど、古き頭腦に伯爵を光榮として父子の膝詰に妻帶を迫らるゝは、人知れぬ戀を持つ身の省三に猶更ら苦しく、今日の出がけを引留められしも、果して例の一件、

父の傳兵衛は葉卷の煙を吹きながら、今までの如くに睨み付けて激しき言葉もなく、わざと和かに滿面の微笑を浮べ、

「省三、どうだね、外の事でないから、無理に押へも仕ないが、これほど親が心配て折角、こゝまで漕付けた苦心を少しは考へても宜からう、なるほど、お前のいふ通り今日この川口家として、わざ〳〵華族の嫁を迎へなくとも十分だが、十分の上にも十分に仕たいのが人間の常で、第一お前に對する親の慾だよ、はゝゝゝ」

面白からぬ省三も、なるべく今日は柳に風と受けて、

「いろ〳〵と有難う御坐います、併し此間も申し上げました通り、相手の華族と華族でないとに拘らず、そンな事に付ての議論めいた事は一切、捨てゝ仕舞ッて、ごうか三十になるまで、此まゝに願ひたいンです、今年まだ二十六ですもの、はゝゝゝ昔は二十五六で妻子を持ッてるものは多かッたかも知れませンが、餘儀なき大勢上より、社會的に統計された今日の二十六は、お父さン、やッと机の上を離れたばかりで、いよ〳〵これから實地に腕を試さうといふ大切な時ぢやありませンか、いはゞ戰場に向ふ初陣の身體ですよ、つまり勢ひ込で外へ氣の張ッたところを、動もすれば人情の弱點で、内へ引かれ易い妻を迎へるのは、折角の出鼻を折られるやうな氣がして、自分ながら惜しく思ひま

す、決して、お父さンの思召を反くンでもなく、また青原伯爵の令孃に對して何等の意味もありませン、たゞ單純に三十まで、こゝ四五年の間、どうか此まゝの獨身で思ふ存分、身輕に働けるだけ働いて見たいと考へます、もし萬一お父さンが御病氣であるとか或は老衰せられて仕事が出來ないとか、いふならば兎も角、今日の若いものは迚も及ばない其、その御壯健でいらッしやる以上、この省三が急いで嫁を迎へなくても、宜いぢゃ御坐いませンか」

華族反對の議論を、却て不利益と考へ、他の方面より自己本位の理詰に防げば、父も今までの無理往生に壓迫するは却ッて效なしと考へ、ます〳〵微笑を浮べながら、

「ところがね、省三、困ッた事が出來たよ」

「どういふ事で？」

「先月だッたか、お前、上野を散歩して居た事があッたらう」

はッと思ひしが、わざと平氣に小首を傾けて、

「さうですね、先月、や、ありました、幸ひ其日は會社の方に用がなかッたもンですから、上野の博物館でも、見ようと思ひまして、たゞ一人、ぶら〳〵」

「その時だ、その時だよ」

その時は現在お雪を連れて根岸の家を見せに行く途中、家令めいた老爺に守られ侍女を從へて我に會釋の目禮せしは、たしかに青原伯爵の令孃と思へる省三、さア面倒なりと、そろ〳〵顏に不安の色を浮べながら、もし萬一、現れし時は現れし時、兼ての覺悟、これに對する度胸を定め、現在お雪の名を出さるゝまでは、とぼけぬいて、

「なるほど先月の中旬頃、たゞ一人でぶら〳〵上野の博物館を」に行きましたが、お父さ

ン、その時だと仰しやるのは全體、どういふ事です」

父の傳兵衛、老の赤ら面を皺めて、にや〳〵と笑ひながら、

「省三、その時、お前に行逢ッて、すれ違ひに會釋　目禮したのが今いふ、青原伯爵の令孃だよ」

始めて知れるが如くに、

「はゝア、あれですか、此方は少しも知りませンが、隨いて居た五十ばかりの人が丁寧にお辭儀を仕ましたから、帽を取りましたが、はゝア、あれが、さうですか」

「最初お辭儀をしたのが家令で、お前は知らなくッても、お前の顏を先方で能く知ッてるからね、そッと令孃に耳打を仕たのだ、ところで本人、よほど氣に入ッたらしい、無論お前の寫眞は渡してあッたが、寫眞よりも實際の、お前を見てね、はゝゝゝつまり家令



と乃公が内々の相談で、餘所ながら見合をさせられたものと思ッたらしい、それ以來、

はゝゝゝまさか本人の口から催促もすまいが、頻りと催促がましい素振が見えるさうだよ、はゝゝゝもう省三、先方の本人は極ッた心算で居るかも知れないぜ」

つゝましき内氣に生れたるお雪、けば〳〵しき令孃風の大ハイカラに歩み來るを見て、あの時は急に我を離れながら片側を歩みしため、幸ひ的にもならず疑はれもせざりしかと一安心の省三、その安心と共に勢ひを盛返して、

「お父さン、そりやア困りますね」

「いや、お前よりも實は今となッて、乃公が困ッてるンだよ、先方では家令が困ッて、此方では親の乃公が困ッてるンだ」

「あなた方の、お困りは御勝手ぢやありませンか、この省三が曖昧な返辭でも仕て居たと

すれば兎も角、多少の犧牲的に或程度までは子として親の言葉を反きませンが、これに限ッて最初から斷然、はッきりと、おことわり仕てるンですからねエ、加之も外の事とは違ひます、人間生涯だ、一度の大切な取極で、いくら何でも、さう輕々しく、品物を遣ッたり取ッたりするやうな工合に勝手な深入りをされては、實に困ります、お父さン、あなたは先方へ對して、どのくらゐの程度まで御相談なすッたンですか」

老獪なる父は、わざと困却の顏色を現はして、眉を顰め腕を組みながら、

「さういはれて見ると、なるほど、こりやア乃公が早まッたよ、實は省三、今日この川口家の財産を讓るばかりでは親として滿足しない、この財産に猶更の光輝を添へて、只お前の身體に箔を付けたいため、内々お前は承知して居ると、家令にまで、言質を與へて仕舞ッたよ」

省三、溜息を洩らして暫し無言の後、

「よろしい、お父さン、この省三さへ約束を守らない不信用のものになれば宜いンでせう、つまり親不孝の我まゝものになれば、お父さンとして先方への申譯は幾何もあるでせう」

「いや、その點はね、また考へるが、さし當ッて今日、現に困ッた事があるンだよ」

「そりやア、どういふこッてす」

「今日ね　本人の令孃が、それとなく、こゝへ來る筈になッてる、無論、改まッて御馳走するンでも何でもない、ちよいと只、手輕に應接所でね、コーヒと菓子を出すぐらゐにして、はゝゝゝ後は省三、どうでもなるから今日のところだけ、お前、談話に出て貰ひたい、さう仕ないと川口傳兵衛の顏が丸潰れになるからね」

我家にて父の前、急用に託言けて遁出されもせず。まして今日は平生の激しき言葉もなく、

たゞ困ッた困ったの一點張に押詰められし省三、
加之も青原伯爵の令孃照子、現在その本人を應接所に通して、今しも母が初對面の挨拶に
出でしといふ間際、
父の傳兵衛ます〳〵窮せるが如く、わざと思案に餘れる腕を組みながら、じろ〳〵老の額
越に我子の顏色を見て、
「さう仕たら宜からうね省三、あまり乃公が早まッて萬事、深入し過ぎたやうだが、今更
ら、この年をして川口傳兵衛この面を提げて親甲斐もなく、子息が不承知ですと謝りに
も出られないし、こりやァ困ッたわい、どンな難かしい事でも切拔けて來た流石の乃公
だが、こりやァ困ッたよ」
殊更に絶體絶命の餘儀なき場合を作られたりと、省三は堪へ難き不平滿々ながら、今こな

りて親に喧嘩も仕掛けられず、相手の本人に恥を與へられず、されど聊か恨みがましき一
言、
「お父さン、外の事と違ッて、その子の生涯を犧牲物にした昔でさへ、これだけは親の專
斷にも行かないもンですよ、まして今日は」
「いや、省三、幾何でも不足は後で聞くが、さしあたり今、應接所に來てゐる本人を、ど
う仕ようね」
もはや度胸を定めし省三、眉を顰めながら首肯いて、
「仕方ありませンから、逢ひませう」
「逢ッてくれるか」
「逢ひます、兎も角も逢はなければ、ならないンでせう、おッ母さン一人に任して置くと、

この上また、ごういふ、ぬきさしの出來ない事になるかも知れませンから早速、逢ひます」

「逢ふは宜いが省三、お前、折角、逢ッて妙に變な工合ぢやァ猶更ら困るぜ」

「そこは御心心なさい、たとひ親子の間に如何なる行違ひの不愉快があるにしても、その不愉快を他人へ持ち出すやうな省三では御坐いませン、あくまで紳士の體面を保ッて、先方の感情を害さないやう、きれいに一通りの談話を交換いたします」

「や、なるほど、さういふところが洋行して來た價値だ、はゝゝゝ、しかし始めてだからね、その脊廣では、いけまい、フロックと着替へたら、どうだね」

「なァに十分、これで十分です、工場の主人の子息ですもの、またフロックが紳士といふ譯でもありませンからね」

「ぢやァ和服にして、袴でも穿いた方が」

「それにも及びませン、もし惡い洒落氣でもあれば、淺黄の職工服を着て出ますよ、華族の令孃、却ッて對照が面白いでせう、はゝゝゝ」

聊か自棄に強ねて笑ひ出しながら、座を起ちしが、應接所へ行く途中の廊下に暫し停まりて一思案、

御主人へ御挨拶にと稱して、今まで付添ひし家令は去り、ちよいと失禮いたしますと言葉を殘して、我子と入代りに母は去り、この應接所に差對へるは青原伯爵の令孃照子と省三の只二人、

あらゆる當世風の流行を遺憾なく飾られたる照子、人工術の化粧法は殆ど女優式の程度まで進みて、華族の令孃といふには聊か晴れがましき濃艶に過ぎたれど、こゝが本人の最も

現代的に發揮せる誇りとして、元來の容貌また世間普通の十人並に及ばざれど、二十歳の今日まで公平なる批評を受けし事なき境遇に育ちて、尙更ら他を解せざる自我の念に强く、神經質に痩せたる輪廓の尖れる鼻頭へ、天晴の美人といふ色を我まゝの無遠慮に現はしながらも、省三の入り來るを見るや否、流石その人には恥づかしき伏目勝の顏を赤め、椅子を離れてテーブルの彼方に半身を立てし風情、

これほどの飾りも、これほどの誇りも、これほどの思はせ振も、省三の心には一切さらに何等の感じなく、たゞ粗末なる人形に美はしき衣裳を着せたるのみ、まして自己の主義に反せる人爲的の階級產物、加之も不愉快なる壓迫的に强ひられむとする相手、これを天生の自然美に作り出されて哀れに優しきお雪を聯想する目より見れば、花の色香もなき枯木に對ふが如く、その輝けるダイヤモンドは、たま〳〵宿りし螢の光りかゞ思へるのみ、

されど冷笑を以て迎へられもせず、殊更ら相手の自尊心を傷くるにも及ばず、慇懃に初對面の挨拶、

「川口傳兵衞の子息、省三で御坐います、わざ〳〵見苦しいところへ、ようこそ、入らッしやいました」

全身に如何なる波動を來せしか、平生の氣質も何物かに奪はれたるが如く、案外の謹ましさ、身を縮めて聲を細めながら、

「初めて、お目にかゝります」

戀も糸瓜もない省三、今この場に寧ろ一種の感興を催して、おもはず微笑を浮べながら、

「いや、初めてゞは御坐いませンよ、たしか先月、上野を散歩の節、ちらと、お目にかゝッたやう思ひますが」

聊か戯れに鼻の頭を撫でし筈なれど、それを何と受けしか、さも嬉しげに會釋して、

「おや、さうで御坐いましたね、あの時は、失禮いたしました、をり〳〵上野へ、御散歩に、居らッしやるンで御坐いますか」

さやう、その上野の森影に可哀さうでならないものが一人、居りますよと、いひたき省三、わざと手輕に何氣なく、

「あまり方角も違ひますから、をり〳〵も參りませン、幸ひ近くに用でもあッた時だけ、ちよいと、あの山の中を歩く氣になりましてね」

「まア、おめづらしい時、お逢ひ申しました事」

よく〳〵御緣がありますねと出られては、それこそ大變なりと恐れて、急に退却しかけし省三、其まゝ椅子を離れ、

「只今、阿父が伺ふで御坐いませう、どうか、御ゆるりと」

青原伯爵の令孃照子を置去に遁げ出す如く、應接所の扉を後ろ手に閉ぢて、長き廊下を急ぎ足の省三、折しも父の傳兵衛は奥より出で來りて、立停りながら眉を顰め、

「ぢこへ行く」

わざと何氣なく手輕に、

「もう濟みました」

「濟んだとは、何が」

「もう濟んだのです、なるべく先方の氣分を損じないやう、華族の令孃といふ意味に於て相應の敬意を拂ッて來ましたから、あれで宜いでせう」

「お前はそれで宜いにしろ、あンまり早いぢやないか、わざ〳〵折角の訪問に對して三分

か五分は、あまり無愛嬌ぢやないか、これから乃公が往ッて三人で、面白く世間話でも仕ようかと思ッてるところだ、さア省三、も一度」

「あのまゝで、お父さンが其處へ入らッしやれば兎も角、一旦、挨拶をして出て、また直ぐ逆戻りは變ですよ、却ッて何だか呵しく、感情を害するかも知れませンから、これで御免を蒙ります、お父さンは別に改めて、お逢ひなすッた方が、よくありませンかね、萬事、形式生育の人には猶更ら、さうですよ、同じ人間の出直しは、いけませンな」

「まア何でも構はないから乃公と一緒に來い、お前は默ッて居ても宜いから是非、も一度顏を出してくれないと困る」

「はゝゝゝ何でも構はないから來いは無理ですよ、無理よりも無意味ですよ、ほンやりと只、默ッて居るくらゐなら居なくッても差支ないでせう」

「だからさ、つまらない理窟をいはずに、あッさり出直して來て心持よく話せといふンだ、もしお前の談話が途切れた時は、うまく乃公が相槌を打ッてやるよ」

省三は立ちながら聊か容を改めて、

「お父さン、全體それは何のため、何の必要上、それほどまでに父子二人が心配して、相手の機嫌を取らなければならないンです、たとひ三分でも五分でも、現在あの人に向ッて敬意を拂ッたのは、つまり自分の本意でなく、實は子として親に對した意味です、もし出直すとすれば、お父さン、この省三は露骨に大膽に遠慮なく、何を言ひ出すか知れませンよ、時代の推移を解せざる華族なら華族で寧ろ昔の大名氣質に重々しく構へた方が却ッて稚氣を帶びて芝居じみた面白味がある、それを現在まだ嫁入前の身體で、のこのこ押掛けて來て、なまじッか妙に新らしがるところは一種の堪へ難い臭氣紛々、鼻持

がなりませンよ、お客様も實際あゝいふ相手は頗る不衛生の極です」

迚も尋常の言葉では此の難關を脱れ難しと、もはや半は自暴に捨身の捨白、父の傳兵衛は呆れて怒る隙もなく應接所に氣を取られて急ぎし後姿を、見送りし省三そのまゝ我部屋へ、一旦は我部屋へ入りしが、母の目にも觸れず其まゝ邸宅を飛び出して、虎口を脱れし如く、ほッとせし省三、

電車に運ばれて谷坂本の停留場より急ぎ足に戀の宿、

いそ〳〵と嬉しけに迎へしお雪の顏を見れば、今日は猶更ら省三の目に、くッきりと浮き出せし顏の輪廓、はッきりと冴えたる色に白粉氣もなく、青味がかりて水際の立ちし額の毛際、今にも滾れるかと思はるゝ片頰の笑渦、

苦しき山を越え谷を渡りて、やう〳〵春の野に出でたる心地、上野の森に對へる二階の障子を開けさせ、我が身を倒すが如く八疊の中央に大の字となりて、ぶッ〳〵と天井に吹く大息、

お雪は思はず眉を顰めながら、

「まア、どうか、なさいましたの」

大の字形のまゝ片手を枕として、

「今日はね、くしや〳〵で面白くない、氣分の惡い事があッて、やッと無理に脱けて來たが、どういふもンか、まだ癇癪の蟲が治らないから暫時の間、かうして置いて貰はう、かうして誰に遠慮もなく苦勞もなく、うるさい世間といふものゝ一切を離れて、自分の身體を自分の思ふ通りに扱へるのが何より人間第一の幸福だ」

寢ながらお雪の顏を見て、その目を其まゝ障子の外に向け、

「いつ見ても、上野の森は宜いねエ、どれほど巧みに手を入れても植木屋の鉢植と違ッて、あの枝振、あの葉色、畫にも描けない、あれが天生の自然美だ、少しも人の細工や鋏の這入らないところに得もいはれず、見飽の仕ない風情があるよ、はゝゝゝあゝ好い心持だ、すうッと頭腦の中を洗はれるやうだから、これで今に氣分が直ッて來るだらう」

片手は膝枕、片手にポケットを探りて舌鼓、

「ちよッ、仕舞ッた、あンまり慌てゝ莨を忘れた」

「お莨、過日、入らした時お莨が二本、殘ッて居りましたから、兎も角あれを持ッて參りませう」

急いで梯子段を降り行きしが、また直ぐに上り來て、丁寧に半紙を卷き大切に包みし二本の埃及莨、そッと差出しながら、其の名も問はず、

「これを一本、見本に持ッて行けば、どッかに御坐いませうから、その間、ほゝゝゝ御辛抱なさいましね」

一本見本に持ち去らむとするお雪の手を押へて、その顏を見上げ、

「この莨でなくッても宜い、何でも構はない、近いところにあるのをね、わざ〳〵探すには及ばないよ、どンな莨でも、かうして此處で吸へば生命が延びる」

お雪、いき〳〵と張切る目元に睨むが如く、

「まア、お人の惡い、お世辭ばかり仰しやいます事」

くるりと起き直りし省三、聊か怨めしげに、

「これが世間へ對するご同じやうに、お世辭と聞えるかね」

「だッて、さうで御坐いますもの、生命が延びるの、何だのと」

「眞實だよ」

「もう、お莨、買ッて上げませン」

笑ひたきを笑はず、薄絹を張れるが如き頰を含みて、わざと其まゝ降り行く後姿、省三ま た身を倒して大の字となり、天井を見上げながらの獨言、

「富貴も名譽もない」

富士、敷島、やう〳〵金口だけ似たるアルヤ、この三色を手に持ちて、いそ〳〵と二階へ上りしお雪、

「どこを捜しましても、あのお莨は、この近處に御坐いませンの、上野まで行けば、ある さうですが、まゐりませうか」

大の字に身を倒せし省三、輕く起き直りて首肯きながら、

「なァに今度、二函か三函ばかり持ッて來て置かう、あれは百本づゝ這入ッてるンだよ、しかし今日は、これで結構、十分だ、やァ富士に敷島にアルヤ、大變に仕込ンで來たね、はゝゝゝどれから吸はう」

「ほゝゝゝごれからでも、おすきな方から」

「いや、折角、かうして買ッてくれたのだから、お指圖に從ッて煙に仕よう」

「また意地の惡い事を、ごうせ、お口に合はないンですから」

「さうでない、さうでないよ、さう冗談に取ッては困る、先刻も云ふ通りね、今日は面白くない事があッて外に紛らすところもなく、この頭腦を洗ひに來たンだからね、莨の善惡に拘はらず、どれを吸へとか、飲めとか」

「まァ御無理な事ばかり、では、そちら向いて居らッしやい、ごれに當るか、そッと出し

ますから」

「や、そりやア妙だ、智慧も心配も何も捨てゝ仕舞ッて、かういふ馬鹿々々しい小兒のやうになれるのは、こゝだけだよ、はゝゝゝこれで宜いだらう」

「いゝえ、もう少し向ふを眞ッ直ぐに」

「かうかね」

「いけませン、さう貴君、ちよい〳〵横目を使ッては、正直に上野の森の方を見て居らッしやい」

「ぢやア、これで、どう」

「默ッて」

「なか〳〵文句が多いね」

「ほゝゝゝそして、其お手を後の方へ、あら、お慾の深い、兩手では御坐いませン、一本より上げませンから片手で澤山」

せめて金口だけでも似たるは、その味も似たるかとアルマを一本、そッと後ろ手の上に載せて、

「これは何で御坐いませう」

「こりやア直ぐ分るよ、アルマだらう」

「おや、まア」

「アルマはね、細くて少し平ッたいから直ぐ分る、はゝゝゝ」

「では、これを止して今度は、これで御坐いますよ」

「さア、むづかしいぞ、富士と數島に違ひないが、どッちも同じやうで、さア閉口だ、待

てよ」

「もし當らなければ、取上げて仕舞ひますよ、平生、意地の悪い事ばかり仰しやるから、かういふ時お莨が當らないで罰が當りますの、ほゝゝゝ」

「いよ〳〵女の本性を現はして來たね、女といふもの、いくら優しい顏をして居ても、こゝれだから恐ろしい、はゝゝゝところで、これは敷島だ」

實は富士、お雪は慌てゝ用意の敷島一本、そッと戴せ替へながら、

「當りました」

目に見ざれど、これを手觸りに知りし省三、その哀れさに思はず涙を含みて、暫し振返りもせず、

「當ッたか、やれ嬉しや、當ッたかい」



我國に輸入せられたる最高價の埃及莨を緞子張の大椅子に埋もれて吸ふよりは、富士か敷島かと一本の莨を戯れの後ろ手に受けて上野の森を見ながら借屋住居の二階に吸ふ省三の嬉しさ樂しさ、

ダイヤ眞珠エメラルド乃至ルビーの寶石類に輝ける人工美の粧飾令孃に有難迷惑の戀を仕掛けらるゝよりは、銘仙の常著を勿體なしと立働ける天生美のお雪に戀を宿せし省三、加之も騷がしく蒼蠅き世間を離れて、靜に心地よげに微笑を浮べながら、

「他人から見れば小兒のやうだが、やッと、これで面白くない今日の頭腦が洗へた、あゝ好い心持になッた、いつまでも此まゝ此心持で居たいが偖、世の中は此方の思ふ通りに、さうも行かない、あの森の隙間が赤く夕日に染ッて、その下の方が次第に段々と薄闇くなる時分、また嫌な事を聞きに歸らなければならない」

何とやら平常になく打沈みし言葉の端々、お雪は思はず眉を顰めて、

「何か、御心配でも、御坐いますの」

「いや、別に、心配するほどでもないがね、ちよいと面倒な事があッて、それを、どういふ工合に仕ようかと考へてるンだ、なアに構はず平氣で居れば居れるが、此方の平氣で居る意味を誤解されると、その誤解から却ッて困る事が出來るしね」

お雪ます〳〵心にかゝりて、省三の顔を差覗くが如く、

「まア、どんな事で御坐います、どうせ、何の、お役にも立ちませンが」

省三は胡坐の膝を坐り直して、

「役に立つ、立たないは兎も角、話さうかね、實は外に、話すところも、相手もないンだよ」

お雪は我を忘れて、その言葉に摺り寄りながら、

「もしや、もしや萬一、かうして戴いてる事が、ごなたかに知れて、それで、御心配なさるンでは御坐いませンか」

「さうでない、大丈夫、戀の神樣は守ッてくれてる、まだ誰も知らないから、さうではないが、近來、或華族の令孃で、ことし二十歳になるのを是非とも嫁に取れと、うるさく强ひられてるンだ　現に今日も其、その本人が、のこ〳〵遣ッて來てね、困ッて仕舞ッて餘儀なく仕方なしに逢ッた事は逢ッたが、いやはや何ともいはれない一種の、いやアな氣がして、どうなるとも後は構はず、早速こゝへ遁げ出して來たンだ」

みる〳〵お雪の美はしい顏に花の色香は奪はれて、省三を見詰めし無言の兩眼に溜涙、をり〳〵それとなく父にもいはれ、兄は猶更ら初めより妻たらずも戀に滿足せよとの言葉、

お雪もまた哀れに我身の運命を顧みて、華々しく世に榮えむとは願はず、生涯を人知れぬ日蔭に置かるゝものゝ覺悟しながら、現在その人へ他よりの緣談、加之も華族の令孃と聞けば、まして我身の戀は今なほ名ばかりの戀、

妬むにあらず憾むにあらねど、たゞ優しく嬉しき恩人とするには、あまりに優し過ぎたる恨み、あまりに嬉し過ぎたる妬み、

お雪は一言も口に出し得ず、無言のまゝ差俯いて兩眼に涙を含めば、これを慰め顏の省三わざと輕く平氣に笑ひながら、

「馬鹿々々しい、本人の此方が承知しないものを、たゞ相手ばかり連れて來て、無理に押付けようなンて、はゝゝゝまるで家畜動物の取扱ひだ、人間が鳥や獸と一緒にされては堪らないよ、ねエ、さうぢやないか、はゝゝゝ」

お雪は猶そのまゝの無言、省三さらに教師の生徒に對ふが如く、

「おまけに相手も相手で、華族、これはね、わざ〳〵敵に取る必要もないが、兼ての主義として萬事の上に好まないンだ、その華族の令孃、いくら美人でも、ごンな教育があッても、どう考へても敬意を拂へない自分としては、猶更ら面白くないだらう、つまり否も應もなく、始めから問題になッて居ないよはゝゝゝ」

お雪、そッと横を向いて、涙を袖に拭へど、まだ無言、

「だからね、氣に掛けては、いけないよ、默ッて居れば知らない事で、實は話さなくッても宜いンだが、かういふ事まで打明けて、隱さずに話すンだよ、わかッたらう、ね、海に浪の消えざると同じやうで、世の中といふものも亦、どうせ人生の波瀾は免れず、いろンな事があると極ッてる、近く譬へを取れば現に今この二階から見える上野の森、あ

れだッて、どこからともなく風に吹かれて、あの通り絶えず木葉は動いてるが、しッかり深く根が這入ッて居るから大丈夫、決して倒れないよ」

お雪、やう〳〵振り返りしが、まだ目に持つ涙、聲も濕みて細く、

「でも、あの木だッて、大風には、倒れますワ、過日、兄さンが來た時、この門の傍にある椎の木、これでも不意に倒れる事があるかも知れないと、さう言ひましたもの」

「ふゝウ、兄さン、そンな事をいふたかね」

「もし、もし萬一、倒れても卑怯に遁げるな、その下敷になッて、死ンで諦めろと」

省三、おもはずお雪の手を固く握りて、

「殺さない、たとひ山が崩れて來ても岩が倒れて來ても、一人では殺さないぞ」

生涯を人知れぬ日蔭に置かるゝものと覺悟せるお雪の心、省三としては猶更ら哀れに窘らしく、最初は我に殆ど喧嘩腰となりし貞吉あの兄まで、それを餘所ながら承知の上、倒るる大木の下敷になるとも諦めよとの言葉は、ます〳〵省三の腹を抉りて、いかにも苦しげに首肯き、

「今いふ通り世の中といふものは意地わるく、自分の思はない不意の出來事が多いからね、この後だッて、いろンな面倒が起らないこもいへないが、しかし大丈夫だ、譬ひ如何なる邪魔があッても、どンな場合、どういふ壓迫があッても、動かない、決して動かないからね、來年まで、來年の十八になるまで、ぢッと此ま〻此處で、かうして居れば必ず、必ず辛抱したゞけの事は仕て見せる」

お雪の顏を差覗いて、わざと横に上野の森を見ながら、俄かに聲を潜め、

「いはなくッても、わかッてるだらうが、こゝをね、よく聞いてくれないと、困るよ、自

分の、自分の考へた逆り、兎も角これで宜いといふ時の來るのは來年だらう、まづ來年として、それまでの間は、どれほど現在、ごう思ッて居ても、その身體を、傷けないで、きれいなものに仕て置く省三だ、せゝ世間に往々あるやうな、わづかな事を恩に著せて人の娘を玩弄物にする、さういふ、そんな卑劣な人間ではない、金で買へる女は今日、いたるところ何處にも澤山あるが、戀は金でも恩でも買へないものとして、實は、實はね、非常の力で、よほどの克己心で自分を押へてるンだ、なるべく自分の戀を輕々しく容易く粗末に扱ひたくない、世の中に只一人で外に取替の出來ない相手だもの、いくら氣は急いても、そッと此まゝ來年まで樂しく大事にかけて置きたいンだよ」

さう大切にせられなくても、さう大事にかけて下さらなくも、よろしいと思へるや否や、お雪たゞ涙の顏を赤めながら、無言の會釋、省三さらに小膝を進めて、

「もし、萬一もし來年になッても、自分の思ッた通りにならない時は、氣の毒だが生涯ここで此まゝだよ、いゝかね、その代り誓ッて置く、この省三も斷じて妻は持たない、あくまで世間は獨身で押通す決心だ、良人といふ名の付くものを持たない女と、妻といふ名の付くものを持たない男と、互ひに變らなければ、それで滿足しよう、なアに人生、つまらない形式に囚はれて夫婦たる事を戸籍面で保證されなくても宜い、あれは、金錢の貸借上を公正證書にするやうなもンだ、双方の心と心に疑はず固く信じさへすれば、證文や印紙は入るもンか、はゝゝゝゝ」

省三、そッと輕く片手をお雪の膝に置けば、お雪その手を遁さじと我兩手を重ねて差押へしまゝの無言、たゞ有難く嬉しく身に餘りし涙、ほろり、ほろり、

病める父の前には身を縮めて頭も得あげず、あはれなる妹の前には肩を狹めて涙脆き貞吉も、社會といふものを向ふに廻して勞働問題となれば、ぎろりと鋭き眼に何物をか覘ふ猛獸の如く、芝の新網に煤けたる三方壁の二階借を暫しの巣窟として、例の田口彌太郎を振返りながら、

「おい、たぬき、まア今日で乃公は一通り、めい〳〵住込だ工場を廻ッて六人の奴を慰め旁、うまく馬力を加へて來たが、貴樣も面を出さないと、いけないぜ、茫然たゞ遊ンでるこ思はれるのは構はないに仕ろ、それぢや折角あゝして別れ別れに主義のため働いてる奴等の張合がない、をり〳〵出かけて得意の駄洒落でも振蒔いて來いよ」

何といはれても田口は相變らず氣輕に請込ンで、半笑ひの女房役に出來た男、

「や、心得た」

「をかしく心得ちやァ困るよ、勞働問題の事に付ても五厘會の事に付ても一切、この乃公に任して置てね、貴樣ァ萬事心得ない方が宜いンだ、妙に間違ッて心得られると大變だ」

「心得ちやァ惡いかね」

「よくないから、生意氣に調子づいて、べら〳〵急所の外れた事を饒舌るなよ、貴樣ァ只その持ッて生れた貴樣の長所で、毒にもならず藥にもならないところを發揮しろ、つまり無用の愛嬌を出して居りやァその内に自然と有用を含まれてるンだ、考へて見ると貴樣ァ氣休めに飲む賣藥のやうな男だぜ」

「賣藥、酷いね、氣休めの賣藥野郎は少々、有難くないぜ」

「なァに賣藥だッて、飲む方の氣休めになれば潔好だ、氣の休まるだけ效驗があるンだから、さう悄氣て變な面をするない、あッて害にもならず、ないよりは優だ、はゝゝゝ」

「悄氣ざるを得ないよ、つまり僕の存在は社會に必要と認められない譯だね」
「まア大して必要の人間でもないね、邪魔にならないといふ程度だらう」
「やれ〳〵、しかし今日は社會に害毒を流して邪魔になる奴が多いから其奴等に比べて見ると君、これでも、さう馬鹿に仕たもンぢやアなからうと考へるが、どうだい」
「いかにも、その通り、だから、さう言ッてるぢやアないか、ないよりは優だと」
「なるほど」
「感心するない、はゝゝゝ」
たぬき野郎といはれても、平氣に半笑ひの田口彌太郎、氣休めの賣藥に譬へられても、ます〳〵笑ひながら膨れ面もせず、ないよりは優な男といはれて、なるほどゝ感心せる顏を、しみ〴〵打守りし岡田貞吉、

「どうしても乃公は、貴樣に叶はないところがあるよ」
「おい君、上げたり下げたりは酷い、下ッきりで澤山だ」
「いや、全くだよ、いくら何でも人には蟲の居處といふものがあるからね、かういへば癪に觸るだらうと、をり〳〵冗談半分に試して見るが、たゞの一度だッて嫌な面をした事はなし、にこ〳〵笑ッて少しも手應のない工合を考へると、つまり相手にされないと同じ譯で、やはり此方が負けてるンだな、はゝゝゝ」
「なアに君、さう取ッてくれりやア有難いが、實は始めから相撲の段が違ッてるから、組ンでも無效だと諦めて勝負を仕ないンだよ、はゝゝゝこれでも君、世間に出て外の奴に向へば、かうでもないぜ、づう〴〵しく度胸よく土俵へ上ッて一番、やッて見る氣だよ、たとひ負けるにしても、さう手鞠のやうに輕く轉ばない決心だ、倒れ際に何か藝を

仕てやらさ、しかし君だけには閉口だ、俗にいふ苦手だね、ごういふもンか立合ッて見る勇氣もない」

「ふざけるな、だしぬけにビール瓶を拋げる勇氣があるぢやァないか、はゝゝゝ」

「や、あれはね君、あの時は別だよ、ありやァ君、まだ君といふものを實際に深く知らないし、加之も七人掛りで、どさくさ紛れの盲蛇に遣ッたからだよ、はゝゝゝしかし君、疑ッて見ると芒も化物で、ちよいとした事が、あゝいふ味方の同士討になるンだ、うッかり出來ないよ」

「全くだ、物は見やうで、とンだ大間違ひを起すからね、こゝへ引移ッて以來は乃公も今までよりは、ぐッと落付いてなるべく、冷靜に、及ぶかぎり曇らない無色透明の目鏡で、たしかに見屆けた上、いよ〳〵となッて飛出す考へだ」

「あの時は僕なンか皆、君に對して自分勝手の色目鏡を掛けて居たからだ、つまり君の妹を、ちらと見た早呑込が間違ひの基だッたよ、時に妹さン近來、どうしてるね、阿父さンの病氣、その後、少しは宜いかね、あゝいふ間違ひさへ無けりやァ一度は心易くなッて置いて、見舞ひ旁、慰めにも行くンだが」

貞吉、俄に眉を寄せて首肯きながら、たゞ一言、

「有難う」

打解けし言葉の端より田口のため父と妹の事を問はれて、今まで冗談半分の貞吉、おもはず眉を寄せながら、

「それを聞かれて、や、おかげで阿父も妹も達者だと、すぐ返答の出來るやうになりたいが、さて人間の運命を抱へ込だ問屋の奴め、さうは安く卸しやァがらない、相變らず病

人の阿父を妹に任して、かうしてるンだからね、考へて見るこ、この乃公も苦しい境涯だ、察してくれ田口、凹垂れずに氣は張ッてるもンの、實のこころは、をり〳〵弱くなるよ」

たぬき野郎といはれて、おい來たと半笑ひの田口彌太郎も、俄かの眞面目に小首を振りながら、

「いくら君だッて、をり〳〵弱くなるのが當然だよ、しかし君は幸ひに好い妹を持ッたンだぜ、例の間違ひを起す前、小田原町を尋ねて往ッて、ちらと路地口へ出たのを見たゞけだが、あの年であの容貌で、もし世間普通の娘だッたら君、病人の親を背負ッて風俗にも構はず自分で働きながら孝行するなンて、迚も出來ないこッた、加之も外には現在この通り何處へでも一人前以上の身體を押出せる兄が居るンだもの、猶更ら出來ない事だよ、たゞひ本人その氣でも、おせッかひに傍から餘計な事を吐して、くだらない智慧を付けたがる奴の多いもンでね、その中を全く感心だ、生れついて親思ひ兄思ひに出來てるンだぜ」

「なアに、さう譽められても困るが、まア兎も角、どッちかといへば、性質の惡くない方だらうよ、その代り乃公は阿父と妹の前ぢやァ哀なもンだ、いつも小さくなッて、世間普通の子息顏や兄顏　した事がない、また實際これで平氣に大きな面を仕られないがね、はゝゝゝつまり人間といふものは內外いづれか一方に強ければ一方に弱いこ極ッてる、まして主義のためこか何こか生活以外の目的を持ッてる以上、どうせ四方八方、うまく圓く調子よく行屆かないさ、いやでも應でも人生の常だ、多少の犧牲は仕方がない、男泣に泣いても、やるだけの事を遣るに付ては餘儀ないこッた」

「まア差當り、さうでも諦めるより外、なからう、しかし妹さンは氣の毒な役廻りだ、やはり小田原町かね」

「いや、實は先月、引ッ越したよ」

「何處へ」

「それがね、乃公も過日、千住へ行く時、ちよいと始めて寄ッたくらゐだから、聞いたッて、つまらない、當分、家の事なンかア忘れたいンだ」

「わざ〳〵無理に聞く必要もないがね、かうして君と一緒に土鍋飯を食ッてる交情だ、また、どンな事で、君の居ない留守に急な用が湧いて來ないとも限らないぜ」

「はれて見れば、いつ何時、もし萬一の場合あるかも知れぬ父の病氣、貞吉は差俯いて、いかにも苦しげに、

「妹は萬事、乃公の氣を知ッてるからね、暫くの間は、なるべく端書も寄越さないやうに心得てるが、今ア上野だ、上野の後で鶯坂に近い、櫻木町を横に這入ッたところで、上根岸だよ」

「それで千住へ行く時、寄ッたンだね。たしか電話局へ出てると聞いたね」

「ます〳〵苦しげの貞吉、面を皺めて、

「ちよいと譯があッて、その電話局も近來、止したよ」

「さうか、ぢやア外に、何か、好い内職でも」

田口は同情の餘りに問へば、貞吉は猶更ら追詰められて胸を裂かるゝ心地、

「世の中は方便なもンでね、飢死もせず、どうか、斯うか、父子二人、食ッてる」

女房役の田口は平常よりも早く起きて、ばた〳〵と焜爐の下を煽ぎ出せし音、今朝の新聞を手にせる貞吉、振返りながら、

「もう飯炊にかゝるのかね、いつもよりは少々、早いやうだね」

「さッと一時間、早いンだよ、いよ〳〵今日から僕も一通り、ずッと六人の工場を廻ッて來る心算だ」

「や、それでか、ぢやァ何處か一個所、晝飯の時刻を覘ッて行くンだな」

「外の居職と違ッて、面會謝絶の時間責に縛らゝてる身體ァ、かういふ時に困るな、どうしても晝の休憩か夜の相手で、おまけに六人とも場所が飛放れてるから、ちよいと逢ッて來るにも骨が折れる」

「いくら暇が取れても骨が折れても、出かける方は樂だよ、ところで今日の第一番は何處にする」

「やはり君の廻ッたと同じ順で、北の端の千住から始めよう」

「千住、おい田口、まさか用もなし、わざ〳〵捜して寄りもすまいが、きのふ話した乃公の家なンか、尋ねてくれるな、阿父も妹も萬事、あの通りの引ッ込み思案で、人に逢ッたりする事を、あンまり好まない性質だからね、其うち乃公ミ一緒に氣持よく笑ッて行ける時節も來るよ、はゝゝゝ當分まァ、そッとして置きたいンだ」

「いくら氣の毒に思ッたッて君に默ッて、のこ〳〵僕が一人で此面を出せるかね、あの時あゝいふ間違ひを起して、加之も君その額口へ疵痕を殘した野郎だ、もし道で逢ッたら遁げるくらゐだよ」

「さう遠慮するにも及ばないが、お互ひに親も同胞もないものとして、やらなければなら

ない目的を抱てるンだから、なまじッか枝葉に渡ッて同情は却ッて、事の妨げだ、どんな苦しい場合があるに仕ろ、あくまで男と男の腕ッ節を組ンで揃へて行かうぢやないか」

「なるほど、さうだな、世の中は思召より握飯で、手の屆かない口だけの情や親切は、なンにもならない、折角よく寢てる子を起すやうなもンだ、はゝゝゝ」

今朝は味噌汁もない澤庵漬の朝飯を終りて、ぶらりと新網の塒を立出でし田口彌太郎、釜を伏せたる如き古帽子に鼻緒の弛みし麻裏草履、黑ッぽく垢染みたる單衣にシャッだけは近來の洗濯か白く際立ちて、紺木綿の兵兒帶を鷲摑みのやうに尻の上へ結べる工合、どう見ても油臭い淺黃服を脫だ男、加之も元來の氣輕に恍けたる奴、岡田の前では唸らねど、自己一人になれば道を歩みながら小聲の鼻唄、

「上に仕ようか下に仕ようか、帽子買はうか下駄買はうか、兩方買ひたし錢はなし、や、こりや〳〵」

參謀部より出でゝ戰線に立てる味方を勵ますが如く、晝飯の休憩時間を考へ、まづ千住の工場を訪ひし田口彌太郎、

その歸り道を電車にも乘らず、大橋を後に三輪を過ぎ坂本通りまで歩み來りしが、右側の町つゞき屋根越に上野の森を見て、ふと思ひ出せしは岡田の阿父と妹、

いまだ一度も逢ひし事なく、現在また岡田の口より固く差止められしが、今日これで外に用のない身體、わざ〳〵廻らずとも、ちよいと直ぐ一足を運べば上根岸、まして長の病人に年の行かざる妹、もし萬一の場合に賦付ける事のないにも限らずと、たゞ友達への親切よい餘所ながら後日の爲め、せめて家だけでも見て置かむと、番地は聞かざりしが、驚

坂に近く櫻木町の横へ岡田久藏といふ表札を目當に、ぶら〳〵と入込みし二曲りの角、折しもお雪その横町より小急ぎに來りて、細き道幅を片側に倚りながら行過ぎしが、田口は小田原町にて見覺えの顏、さては此邊かと垣根つゞきに五軒目を見れば、果して岡田久藏の表札、

小さけれど潜り戸の門ありて、竹の垣根越に庭もあるらしく、茂れる椎の木の間より二階の横窓、いかに安く見ても借家とすれば月に三十圓前後、加之も今あの角にて出逢ひし妹は、小田原町にありし時と違うて、艶々しき當世風の束髮に銘仙の常着、やう〳〵手内職に父子二人の口過と思ひし田口は不思議の眉を顰めて小首を傾け、暫し門の前を彼方へ此方へ、聊か隙ける竹垣の間より差覗きしを、つい近處へ買物に出でしお雪、立歸りて薄氣味わるく、其まゝ家へも入らず打守れば、何氣なく振返りし田口、はッと狼狽て逃場を失ひ、慌てゝ餘儀なき一言、

「岡田さん、此方ですか」

岡田といはれて、お雪は思はず小腰を屈めながら、

「はい手前で御坐いますが、貴君、どちらから」

外に即座の方便もない田口、ます〳〵窮して、

「え、何、此方へは別に、用も何もないンですが、實は岡田君の友達で」

「あら、兄さンの、お友達」

「へい、田口といふもンです、芝の新網で岡田君と一緒に居りますよ」

「まア、さうで御坐いますか、とンだ失禮を致しまして、兎も角も貴君、お這入り下さいまし」